
桜のひみつ

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜のひみつ

【Zコード】

Z9216D

【作者名】

Crystal

【あらすじ】

伝説の勇者ショウの戦闘能力を調査するため、未来からやって来た少女“桜”。ある日、未来から桜に通信が入る。その翌日、誰にも知られることがなく、桜は如月家から姿を消した…。

第1話 未来への帰還（前書き）

2001/11/15～2001/11/24 連載作品（全5話）
文字だけ4コマの第650話として書いた短編小説。その文字だけ
4コマでは、ショウや優子は学生ではなく、どつかの事務局の職員
だつたりします。

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal
Legend 7-2」 トールマリンの胎動、「Crystal
Legend 7-3」 はじまりの時代、「Crystal
Legend 7-4」 もしかして怪談?
超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰
編」

なんちゅらプラネット シリーズ 「なんちゅらプラネット」
美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談?」
4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ
ート劇場」

第1話 未来への帰還

「…は、はい。…わかりました」
真っ暗な部屋の中に微かな声が聞こえる。部屋の隅の方が淡く光り、3歳ぐらいの小さな女の子が、宝石から空中に映し出された映像に向かって喋りかけていた。

映像が消え、部屋は暗闇に戻る。少女は溜息を付き、壁にもたれかかつた。

「…そろそろ限界…かな」

その声からは寂しげな感情がにじみ出でていた。

「桜ちゃん…、いるの？」

扉が開かれ、廊下の光りが部屋へと射し込む。

「あ。いた」

部屋の中へと入ってきたのはこの部屋の主である優子であった。

「…ママ」

桜は優子に駆け寄り、ぎゅっと足にしがみついた。

「どうしたの桜ちゃん？」

優子はしゃがみ込み、桜の顔をのぞき込む。何も言わずつづみ、いまにも泣きそうな顔をしているのを見て、優子はやわしく抱きしめた。

「さー、居間にいつてテレビでも見よつか」

優子はそれ以上何も聞くことはなかった。

居間では住人がそれぞれくつろいでいた。ここ如月家では一年前から住人が急激に増えた。それまでは優子と双子の兄であるショウの一人暮らしであったが、迷子の精霊族、桜を預かったことを皮切りに、天空族のルワー、精霊族のコウコとシン、光竜アクアマリン、そして十年以上も仕事で家を空けていたショウと優子の母親綾菜も、最近ではずっと家にいることが多くなつた。それは、一年前では考

えられなかつた賑やかさであつた。

しかも、それだけではなかつた。妖精族のアリス、精靈族のセリアも久しぶりの再会を切つ掛けにほんと毎日のように遊びにきていた。さらには職場の責任者であるラルドも最近では来るようになつた。さすがの優子も家に来てまで上司の顔を見るのは遠慮したかつたが、生きる非常識であるラルドに“くるな！”などと面と向かつて言えるはずもなかつた。

「なあ、ゆう…。桜のやつ、どうしたんだ？」

ソファードアクアを抱いて座つている桜のわざかな心の乱れを、ショウは鋭く感じ取つていた。

「うん…。それがよくわからないの…」

優子は、桜が真つ暗な部屋の中に一人でいたことをショウに伝える。

桜は近くの自然公園で保護された精靈族の少女である。何らかの事故により、迷いの森の中心にある人間界と精靈界を繋ぐゲート“こだまの樹”を通つて人間界へやつてきたと考えられていたが、桜は目的があつてショウたちと接触したことが、最近になつてわかつた。その目的とは、ショウの勇者としての戦闘能力を調査することだ。しかし、いまの平和な時代では勇者ショウが力を発揮する機会もなく、桜の目的は一向に達成されることはなかつた。

桜はショウやラルドと同じように時を操る能力を有している。その能力を使い、未来…あるいは過去からこの時代へとやつて來たのだ。普段桜は3歳児の姿をしているが、それも時の能力で姿を変えているだけで、実際は12歳ぐらいの少女である。

ショウは、そんなことをすべて承知の上で桜と生活していた。桜が何者であろうと、いまやかけがえのない家族の一員には違ひないのだ。

「桜…どうした？ また…上司（？）に何か言われたのか？」

ショウが桜の隣に座り、優子たちには聞えないように耳打ちをする。

「パパ……」

苦笑いをする桜。

「まあ～、そんなところですか……」

監視をする対象に心配されていりようでは、桜の目的は一生達成できないだろう。

桜は、最初でこそ目的達成のためショウが闘つ機会を窺っていたが、最近ではどうでもよくなっていた。ショウのことを”パパ”、優子のことを”ママ”と呼び、如月家で心地よい時間を過ごしてきた桜は、こんな生活が永遠に続くこと祈るようになっていた。

「あまり気にするな……。なんならオレが文句言つてやるうか?」

ショウの冗談まじりな言葉に、桜はクスクスと笑い出すのだった。そんな様子を見て、優子はもつ心配はいらないと思つのだった。

深夜一時……、優子と一緒に寝ていた桜は、ゆっくりとベッドからぬけ出した。それに気づかない優子は、静かな寝息をたてている。

優子をジッと見つめる桜の瞳には、つっすらと涙が浮かんでいた。

「ママ……、『めんね。…』さよなら」

桜は本来の姿（12歳）に戻り、優子の部屋を後にするのだった。それ以降、如月家から桜の姿が消えてしまった。

翌朝、優子は隣に寝ていたはずの桜の姿がないことに気づいた。最初のうちは、単に早起きをして居間にいるのかと考えていたのだが、そこに桜の姿はなかった。

「まさか……」

優子は昨夜の桜の様子を思い出し急に不安になる。

「桜ちゃん、桜ちゃん！」

家中を走り回る優子。いつかはこんな日が来ると覚悟はしていたが、それがこんな突然に訪れるとは思つていなかつた。それはまだずつと先のことだと思っていたのだ……。

「ゆう……、どうした?」

呆然としている優子に、ショウが声をかける。

「お兄ちゃん…。桜ちゃんが、桜ちゃんがないの…」

優子はショウに泣きついた。

ショウはやさしく受けとめ、軽く頭を撫でた。

「大丈夫…。ちょっと出でているだけだよ…」

ショウは瞬時に桜の生体パターンを探索した。人には固有の生体パターンがあり、ショウはそれを探ることによつてある程度の位置を把握することが出来る。

『人間界には…。いや、すでにこの時代にはいないのか?』

さすがのショウも時空を越えて探索することは出来ない。この時代から離れたのであるとすると、桜がいた本当の時代をしらないショウたちにはどうすることも出来ないのだ。

その日から、いつものメンバーによる桜の搜索が始まった。如月家のある光風町と緑柱石のある金縁石地区を中心に、天空界をルウーが、精霊界をユウコとシン、そして魔界をフォースが搜索する。しかし、ショウの感知能力は正確だつたようで、桜の手掛かりを見つからなかつた。

桜が姿を消してから三日が過ぎた…。

「桜ちゃん…」

沈み込む優子…。それはまさしく、子供を心配する母親の姿だつた。

「そつか…、桜ちゃんつてこの時代の住人じやなかつたんだ…」

アリスはショウから真実を聞いた。

桜が別の時代から來たことを知つていたのは、ショウのほかにルウーとラルドだけであつた。しかし、桜がどの時代からやつて来たかについてはルウー やラルドも知らないようだつた。

「このままじや、ゆうがまいつてしまつ…。なんとか桜と連絡を取らないと…」

その時代さえ確定出来れば、同じ時の能力を有するショウなら桜に会いに行くことも可能なのだ。

「桜ちゃんは、アウインの勇者であるショウの戦闘能力を監視しに来たんでしょう。だったら過去じゃなく未来になるね」

ショウを調査するためにわざわざこの時代に来たところでは、過去からではなく、ショウがいない未来に限定される。ショウは種族こそ人間族であるが、精霊神なみの強大な精霊力を持つため、普通の人間よりは寿命が長い。病気や万一小の事故さえなければ、数千年は生きるだろう。つまり、桜はそれ以上の未来からやって来たことになるのだ。

「じゃあ、てきとうな時代に行つてみれば？」

「簡単に言つくな…。時空を越えるという意味がわかつてているのか？」他の時代に干渉することは、基本的に時空神エメラルドに禁じられている。時空を越え、その時代に干渉することによって世界の運命すら変えてしまう恐れもある。違った世界へ行くことでその時代の歴史が変わってしまうことも考えられるのだ。

桜がこの時代にやつて来たことも実際には大問題であった。本来なら強制的にもとの時代へ送還すべきなのだが、それが不間に付させていたのは、桜がいた時代がこの時代より数千年以上離れていると予想されたことと、時空神であるラルドが黙認していたからである。ラルドの性格から考えると、"面白そだからしばらく様子を見よう" という意味合いが強かつたのだろう。

「とにかく、桜のいる時代が判明するまで動くことができないんだよ」

ショウは少しうらついていた。時代の確定はラルドが行なつている。しかし、いくらラルドが時空神だとはいえ、無限ともいえる時の流れの中で一つの時空を限定するのにはかなりの期間を要するだろう。こんなことになるのなら無理にでも桜のことをいろいろ聞いておくべきだった…。ショウはそう後悔していた。

第2話 天空神、暗殺

ショウたちの時代から約5千年先の未来、桜は精靈界第四聖界“クリスタル”にいた。

精靈界には第一聖界スフェーン、第二聖界カーネリアン、第三聖界アイオライトと三つの聖界がある。しかし、第四聖界クリスタルと呼ばれる聖界は存在しない。そう、第四聖界はショウたちの時代より後に創られた聖界なのだ。そしてこの聖界は、精靈神ショウによって創造されたと伝えられている。

この時代、第四聖界の大國ルチルクオーツが天空界の存在を知り、勢力拡大のため戦争を仕掛けていた。だが、精靈界の一国が、長年魔族や暗黒族と闘い続けている天空族に戦争を仕掛けて勝てるはずもなかつた。

これが発端に精靈界と天空界との全面戦争へと拡大することも考えられる。本来なら、外界への侵略を口論むルチルクオーツに、精靈神による制裁が加えられるところなのだが、天空界側にはこの程度の攻撃など取るに足らない問題であり、定期的に戦闘訓練ができるため精靈神に制裁を控えてもらつていたのだ。

ルチルクオーツではそんなことを知るはずもなく、天空界攻略を信じて何十年も闘いを続けていた。しかし、事態は一向に進展せず、ルチルクオーツ王も苛立ちを隠せなかつた。

そんな中、孤児である桜に時を操る能力があることが発覚する。そして、この状況を打破すべく考えだされたのが、桜を過去へと向かわせ、第四聖界クリスタルの創造主ショウを助つ人としてこの時代に連れてくることだつたのだ。

いま桜は、謁見の間にいた。

「よく戻つた、桜…いや”フローライト”よ…」
桜を睨みつけたまま、一切の表情を変えずにルチルクオーツ王は言い放つた。

「はい！ 国王さま！」

桜は恐怖に震える身体をなんとか抑えていた。桜の真の名は”フローライト”という。親しいものからはフローラと呼ばれていた。

桜は、時の能力が発覚するまで普通の精霊として生活をしており、鬪いに關してはまったくの素人である。そんな桜にできることといえば、過去へと渡り年齢を偽つて如月家へ潜り込むことだったのだ。

「報告書は読ませてもらつた…。まさか勇者ショウが天空の一族だつたとは…」

ショウは天空族ではない。母親の綾菜、そして妹の優子が天空族だという確信も桜には無かつた。しかし、如月家が天空族と大きく関わっていることは確かなのだ。そんなショウに天空族を倒すため力を貸してもらつなど無理な話しだ。

「分かつた。ではフローライト…、おまえにはこれから天空界へ行つてもらう

「えつ！」

自分の役目は終つたものと思つていた桜には驚きの言葉である。

「でも、なにを…」

戦闘能力の無い桜が前線へと向かつても何の役にも立てない。

「その時の能力で、天空神サファイアを暗殺しろ…」

「天空神の…暗殺…」

驚愕する桜…。暗殺など桜にできるはずもない。第一、天空神サファイアといえば、間違いなくショウと優子の母親 如月綾菜のことなのだ。

「待つてください！」

桜は必死に叫ぶが、ルチルクオーツ王は一切反応しない。

「国王さま！」

「泣き叫ぶ桜…。

「連れて行け」

ルチルクオーツ王の命により、兵が桜を連行する。桜には拒否権すらないのだ。

「サファイアさま…。なにも御身自ら出陣されなくても…」

天空城ではルチルクオーツの進軍に備えて、見習いの天空兵を集结させていた。天空界でもこの数千年大きな争いは無く、若い空族は実戦経験が無いものが多い。そのためルチルクオーツの進軍は、変な話し“良い訓練”になるのだ。サファイアはそんな見習い天空兵の引率のため出陣するのだ。

「大丈夫 ちゃんと年休取つてあるから」

サファイアが笑顔で答える。だが、その姿はショウたちが知っている天空神サファイアではなかった。

一対の純白の翼、腰のあたりまで伸びだ髪、それはまさしく空族ルワーの姿であった。しかし、ショウたちの時代のルワーとはかなり雰囲気が違うような気がする…。前天空神である綾菜はまだまだ健在ではあつたが、サファイアという宝石名は娘である如月優子に譲っていた。そう、彼女はショウの妹“優子”なのだ。

「あ、兵士たちに相手は殺さないように念押しをしておいてね フアリスさんと闘うことになるのはイヤだから」

数奇な運命のもと、優子は天空神になつていた。だれもが次期天空神はルワーが即くと思っていたが、ルワーはそれを拒否し今は綾菜と共に人間界で暮らしている。

ちなみに、優子が言う“年休”とは縁柱石の年休のことで、彼女は今だ縁柱石の職員でもあつた（爆）。優子以外の職員も健在で、5千年前と何一つ変わらず元気にやつてている。新たな職員としてセリアが加わったことと、ショウとアリスがこの時代に存在しないこと以外は…。

「サファイアさま、出陣の準備が整いました」

「ありがとう じゃあ、トール地区の結界を一時解除。ルチルクオーツ軍の皆様を御招きして」

天空界の都市部周辺は強度な結界に護られており、実際にはルチルクオーツ軍など進入できるはずもなかつた。しかし、天空界側は

一部の結界を解除してまでルチルクオーツの進軍を許しているのは、天空兵たちに闘いの意味を持たせるためであった。同族を護るという緊張感を持たせ、なるべく実戦に近づけているのだ。つまり、すべてが天空神サファイアの手の内にあった。

桜がトル地区と呼ばれる前線に着いたときには、すでに天空族との闘いが始まっていた。

総勢2万のルチルクオーツ軍に對して、天空族はわずか3百程度。数の上では圧倒的にルチルクオーツ軍が有利なのだが、天空族の防御は硬く、都市を目の前にしてそれ以上進軍することは出来なかつた。天空族は部隊を編成せず、各々が個別に闘ついている。天空族は精霊族に比べ身体能力が優れているため、これほどの人数差でも苦にならなかつた。

しかし、ルチルクオーツ軍はわずか数百の天空兵に数十年も敗戦を続けているため闘い方も死にもの狂いである。天空族に重傷者が出ることもあつたが、そのときは周りの天空兵たちが見事な連携を見せ救助に向かっていた。そのため、これまでの闘いで死者が出たことは一度もない。

「おまえがフローライトだな」

この闘いを指揮する司令官が桜に近づく。

「作戦は聞いている。おまえは任務を果たすことだけを考えろ……」

有無を言わせない表情で桜を睨む。

天空神の暗殺、それが桜に与えられた任務であった。

桜は、前線に天空神サファイアがいることを聞いた。時を止め兵士や天空族の間を駆け抜け、岩陰に隠れる……。その手には短剣が握られていた。身体が震え、今にも口から心臓が飛び出しそうである。

『わたしに…わたしに出来るの?』

自問する桜……しかし答えが出るはずもなかつた。

能力で停止できる時間は約30秒。その間にサファイアの元へ走り、手にした短剣で心臓を貫く、ただそれだけなのだ……。

桜の脳裏には綾菜の笑顔、そして如月家の楽しい日々が浮かんだ。

『どうして…、どうしてこんなこと…』

桜の瞳に涙が浮かぶ。苦悩する思い必死に振り払い、そして桜は時を停めた。

サファイアが控える場所まで50メートルほどを桜は無我夢中で走った。何も考えないように、立ち止まらないように…。徐々にサファイアの姿が大きく見えてくる。 “あと少しで開放される” 桜はそんなふうに感じていた。

桜がサファイアの表情を見て取れる距離まできた。そしてその事実に愕然とする。

『綾菜さん…じゃない。ルゥー…お姉ちゃん?』

それはまさしくルゥーの姿であった。しかし、どこか違うことに

桜は気づいた。

「まさか、まさか!」

全身が震え、その場に立ち尽くす桜…。

「ん! 誰だ!」

能力の限界が越え、時が流れだした。サファイアを護る天空兵が突然現れた桜に槍を構える。その手に短剣が握られているのを見てサファイアの危機を察知する。

「きさまーーーーー!」

何らかの方法を使い、こんな距離まで気づかれずに来たのだ。これは天空神の命に関わること、もはや訓練どころではなかつた。天空兵は桜に槍を突き刺そうとした。

「おやめなさい!」

そんな天空兵たちを優子が制した。

その声を聞き桜は確信した。

「…ママ」

桜の瞳から涙が流れる。次の瞬間、桜は幻のよつに忽然と姿を消した。

どよめく天空兵たち……。

「いまの女の子は……」

優子はその少女を懐かしく思えた。しかし、本当の姿（12歳）をしている少女が、あの桜だとは気づくはずもなかつた……。

第3話 桜のゆくえ

精靈界第四聖界クリスタル、ルチルクオーツ城にて…。

「きさま——、せつかくのチャンスを！」

司令官が桜を殴り飛ばす。

「うつ！」

いきおいよく壁に激突する桜…。激痛、そしてその恐怖に、桜は全身を震わせ泣きじやくつっていた。

司令官は剣先を桜に向けた。

「死ね、この役立たずが！」

桜が天空神サファイア暗殺に失敗した直後、突如、トール地区の結界が発動し、ルチルクオーツ軍は結界外へと押し出された。それから結界が消えることは無く、ルチルクオーツ軍はどうすることも出来ないでいた。その結果を招いたのが桜である。進軍の司令官としては、どうにも腹の虫がおさまらなかつた。

『殺される…』

桜がそう感じたとき、それまで事の成り行きを監視していたルチルクオーツ王が口を開いた。

「まて…。フローライトの能力は今後も役に立つ…。それに…、どうやら天空神とも顔見知りのようだ。いざとこうとき人質に使えばいい…」

ルチルクオーツ王に制されたことで、司令官は渋々剣を収めた。

「それまでは、一度と命令無視が出来ないよう…調教しておけ…」

冷たく言い放つ…。

その言葉を聞いて、司令官はほくそ笑む。

「さあ、さつさと歩け！」

司令官は桜の頭を鷲掴みにし、髪の毛を引っ張る。

「いやあ——！」

桜の悲鳴がルチルクオーツ城に響いた。

「ラルドさん！ いつになつたら桜の居場所が特定できるのですか！」

緑柱石事務局でショウがラルドに詰め寄る。これほどまで声を張り上げるショウは珍しい。

「まあ、落ち着け……（汗）」

その迫力にさすがのラルドもタジタジである。

「桜のいる時代はほぼ確定できた。あとはどの時点で時空を越えたのかを調べている……。2日ほど待て……」

桜が姿を消してからすでに10日。ショウの苛立ちももはや限界を越えていた。

「そんなに待てません！ 桜のいる時代を教えてください……」

ショウが事務机をバンバン叩く。

「……時空を越える前の桜に会つても、おまえのことを知らないんだぞ。少し冷静になれ……」

「くつ……」

ショウは、ラルドの正論に返す言葉もなかった。

本来、この時代に存在するはずのない桜が、もとの時代に戻った……。それは当然のことであり、ショウたちがとやかく言つべき問題ではない。だが、一年も家族同然で暮らしていた桜が、何も言わず姿を消したのは、自分たちに迷惑をかけまいとしたように……、そう思えてしかたないのだ。

もし桜が困つていてるようなら力を貸してあげたい。ショウは本氣で考えていた。

だが、肝心な桜の居場所がわからない以上、ショウにはどうすることもできなかつた。

「ちきしょーーーーーーーー！」

ショウの拳にラルドの机が大きな衝撃音と共に真つ一つになる。

“がたがた”

ショウの叫びと衝撃音にびっくりしたよつこ、壁側にあるロッカ

一の中から音が聞こえた。

『誰かいる…』

ショウがロツカーに向かつて構えた。

このロツカーは普通のロツカーではなかつた。遠く離れた場所や外界（精霊界）に繋がつているのだ。ラルドも怪訝な顔をしている。ラルドの許可なくしてこのロツカーは使用できない。つまり、何者が侵入しようとしているのだ。

ロツカーの一番端の扉がゆっくりと開く。ショウたちに緊張が走る…。

「あ、あの…。お取り込み中すみませんが…、よろしいですか？」

ロツカーから顔を見せたのは、天空神の衣装を纏つたルウーであつた。

「なんだ、ゆう（優子）か…」

ルウーにそつくりな女性がずつこける。

「なんですぐにわかつちゃうのよ――！」

それはまさしく天空神サファイアの名を継いだ優子の姿であつた。優子は文句を言つているが、どこか嬉しそうであつた。

「だつて、ゆうはゆうだろ…」

さも当然のよう答えるショウ。しかし、天空族の姿をしている優子は双子の姉ルウーと瓜二つで、見分けることなど不可能のようと思える。現にラルドは、完全にルウーだと思っていたのだ。

「で、それはいいとして…どうして未来のお前がここに来たんだ？」

ショウはこの優子が未来から来たことに気づいていた。

「あ～、そうだった。お兄ちゃん、この子知つてる？」

優子は記憶石を取り出し、記憶を再生する。

空中に映し出された少女を見て、ショウは叫んだ。

「桜！」

それは紛れもなく、本来の姿をした桜であつた。

「やつぱりね～。わたしのことを“ママ”なんて呼ぶのは、今のところ桜ちゃんしかいないもんね～」

納得する優子。

「それだけ確かめたかったの。わたし帰るね 」 じつ（未来）のラルドさんに内緒で来てるから、急がないと…」

優子は記憶石をしまい、ショウに小さな宝石を渡した。
「その石に、わたしがいる年代の情報が入っているから…。お兄ちゃん…来るんでしょ？」

優子はショウをじつと見つめる。

「一緒に行く…。いいですねラルドさん！」

ショウの決心はすでに固まっているようだった。

ラルドはしばらく考えていたが、不意に電話の受話器を取った。

「アリスを呼ぶ。あいつも連れて行け…」

ラルドはアリスに連絡を取つた。そして、受話器を下ろし優子に近づく。

「それと…」

「え？（汗）」

優子はラルドに睨まれているような気がした。次の瞬間、“ごん！”という音が緑柱石事務局に響いた。

「いつた――――（涙）」

優子が頭を抑えてしゃがみ込む。天空神になつた優子を殴れるのはラルドぐらいなものだろう。

「未来のオレの代わりに殴つておいた…。このロッカーを勝手に使つくな…」

「う、う…」

優子は涙目で恨めしそうにラルドを見上げた。

『何をやつてるんだか…』

ショウは眉間に押さえ呆れた…。

数分後、アリスと合流したショウたちは未来へと向かっていた。ショウたちは時空の流れの中に浮かんでいる。ここには無数の時が存在し、流れを間違えると一度と同じ時代に戻れなくなる。時の

力を持たない優子が目的の時代に着けたのは、ラルトのロッカーのおかげなのである。

しばらくすると、前方に光の扉のようなものが見えてきた。

「さあ～、着いたよ」

優子がその光に飛び込む。ショウとアリスはそれに続いた。

光が收まるとき、そこは緑柱石の事務局であった。目の前には、優子を睨むようにラルドが立っている。優子は本能的に頭をかばつた。しかし、少し遅かったようで、ラルドの拳骨が炸裂する。

「いた――――い」(泣)

なよ」と過激のハルヒと同じ場所を殴られ、優子は泣き出しだす。

「な！」

ラルドが叫ぶ……。

『回り道ある...』

シラカバノ

「ショウ、アリス……。よく来たな……」

ラルドが嬉しそうな顔をする。

ショウとアリスを囲むように、

して見慣れない子供が一人いること以外は、ショウの時代と何一つ変わつていない。驚いたことに、人間族である飛鳥も変わらない姿をしている。だが……、ショウ本人の姿はそこに無かつた。

「ショウ、アリス！」

セリアが一人に抱き合ふ

あなた、どこでここ（縁柱石）にいるの？」
セリアだけが遊びに来たとは考えにくい。アリスは、もしか

ら自分もどこかにいるのかと辺りを見回した。

「あなたたちが逝つてから、ショウの代わりに」の職員になつたの~」

涙ながらに答えるセリア。

その言葉に絶句するアリス…。

「…つまり、あたしとショウは、死んじゃつてこの時代にいないわけね（汗）。…まったく、妙なところだけ原作に忠実なんだから…」

アリスはため息をつく。

そんな様子を、じつと見つめる一人の小さな子供。

アリスはにつこり微笑んで子供たちにしゃべりかけた。

「ねえ、お名前はなんていうのかな~」

「お母さん~」

子供たちは警戒して、ファリスの後ろに隠れてしまった。

「お、お母さん~」

ショウは心底驚いた。

「ファリスさんの子供…なんですか！？」

照れ笑いをするファリス。

「さあ、ショウ、アリス。」挨拶を あなたたちの名前は、この人たちからいだいたのよ」

子供たちは、ショウたちを見上げる。

驚いているショウに優子が衝撃な事実を告げる。

「あのね このショウくんつてお兄ちゃんの生まれ変わりなんだよ」

優子の説明によると、この子は時の能力、アウインの紋章を両手に持ち、ファリスの危機には五精靈となり、成長した姿で闘つそうである。その時には前世の記憶が蘇り、完全にショウと同じになるそうだ。

「で~、このショウくんが、わたしの田那さん候補

優子が小さいショウに抱きつく。

唖然とするショウ。さすがに時の流れを感じずにはいられなかつた。結局、ファリスは父親が誰なのかは教えてくれなかつた。歴史が変わる可能性があるので、ショウもそれ以上聞かなかつた。

だが、それら以外は何も変わっていないような気がした。

「それにもしても、5千年も経っているなんてとても思えませ…」

ショウは不意に窓の外を見た。

“ すが―――――ん！”

記憶石から、そんな効果音が流れ

た。

「……」

ショウが固まる。アリスも興味深そうに窓から外を眺めていた。

「……さあ、桜に会いにいくぞ！」

ショウは大汗をかき、いろいろと深く考えなにように叫ぶのだった（笑）。

第4話 フローライト

ルチルクオーツ城の遙か上空に、一人の人影があつた。その人影は、じつとルチルクオーツ軍の動きを監視しているようである。

「動きませんね…。この数日、何の変化もありません」

長身の男性が隣の女性に声をかける。

「うん…。でも…、いつまでこんなこと（監視）を続けなくちゃならないのかな？」

女性は、うんざりしているようである。

この美男美女の二人は、ルチルクオーツ軍が天空界に侵略し始めたころ、つまり20年以上も、精靈神ファリスの命によりルチルクオーツ城を監視し続けているのだ。たとえ長寿な精靈族としても、ただ監視をするだけというのは耐えがたいものがある。

「ねえ～、退屈だよ～」

女性がじやれるように青年に抱きつく。青年はそんなことをまったく気にせずひたすら監視を続けている。そんな態度に女性はむつとする。

「…あなた、こんな可愛い女の子が抱きついてるんだから…“ちょっと、どきどき”とかないわけ？」

「女の子って…、自分を何歳だと思ってるんですか？」

青年は呆れたようにつぶやく。

「だいたい、あなたは…」

青年が抗議しようとしたとき、女性は城を指差し声を上げた。

「あ、何か出てきた」

その言葉に青年も城に目線を戻す。修練場なのだろうか、城内を開けた場所に動きがあつた。一人の少女が、数人の兵士に連れられて出てきたのだ。少女の腕には鎖が繋がれており、頭や身体のいたる所に痛々しく包帯が巻かれていた。

その少女を見た青年は妙な感覚に襲われた。

「あの子は…」

青年はその少女に見覚えがあるような気がしていた。青年は記憶の糸を辿つてゆく。そして、少女の精靈を感じて驚愕した。

「あれは…まさか、桜さん！」

その言葉に女性も驚きの声を上げる。

「え？ 桜お姉ちゃん？」

「間違いありません。桜さんです！ 本来の姿の桜さんです！」

青年は混乱していた。桜がいたのは約5千年前…、その桜が変わらぬ姿でそこにいるのだ。

『別人？ いや、間違いなく桜さんだ…』

青年が色々と考えていると、兵士の一人が桜を殴りはじめた。

「なつ！」

女性の身体が“ドクッ”と脈打つたように震える。

「桜…お姉ちゃん…」

兵士は何度も桜を殴り倒す。それを見て、女性の瞳が炎のようになる。真っ赤になる。

「あいつらーーー！」

女性は高速で城に突っ込んで行つた。

「あ、お待ちなさい！ 我々の任務は、彼らの監視をすることなんですよ！」

青年たちはファリスの命令でルチルクオーツの監視をしている。それを干渉するということは命令違反になるのだ。

「とは言つもの…、桜さんの危機を黙つて見過すわけにはいきませんけどね！」

そして、青年も急いで女性の後を追つた。

「どうだ、フローライト…。天空神サファイアを殺す気になつたか

…」

兵士に殴られ続ける桜を遠目に眺め、天空界侵略の司令官はそう言った。

両手を鎖で結ばれ、自由のきかない桜。これでは時を止めて逃げることもできない。桜は毎日のように拷問を受けながらも、天空神サファイア…つまり優子の暗殺という命令に背いていた。桜にそんなことができるはずもなかつた。

「おい、鎖を解け…」

司令官の命令によつて、桜は鎖から解放された。桜は兵士二人に押さえつけられる。

「天空神を殺すには…、右手一本あれば十分だな…」

司令官はニヤリと笑い、剣を鞘から抜き放つた。桜の左腕を伸ばされせる。

「い、いや…」

桜が恐怖に震える。逃げようとするが、身体を大人一人に押さえつけられ身動きが取れない。

「やめて…」

司令官が剣を振り上げる。

「いや――――――！」

桜の悲鳴が城内に響く。

司令官が剣を振り下ろそうとした瞬間、上空から黒い塊が降ってきて地面に衝突する。衝撃音と共に砂煙が立ち上る。

「な、なんだ？」

司令官はその出来事に後退する。砂煙が収まつたとき、そこに現れたのは城の上空で監視をしていたあの女性であつた。

「きさま！」

突如現れた女性に驚愕する司令官。

「敵襲――――！」

危機を感じ、城内の兵士を集めめる。

女性は鋭い目つきで桜を押さえつけている兵士を睨み付ける。

「お姉ちゃんを放せ！」

その迫力に押され、兵士の手が少し緩む。その瞬間、女性は高速な動きで兵士の顔面に蹴りを入れる。兵士はそのまま後方へと吹つ

飛んだ。

「桜…お姉ちゃん」

女性は桜を起こし、ぎゅっと抱きしめた。

混乱する桜。この女性は自分のことを知っている。しかも“桜”と呼ぶ以上、如月家の関係者なのか…。桜といつのは、過去で優子が付けてくれた名前なのだ。

司令官は焦りを隠し平静をよそおつていた。

「たつた一人で、このルチルクオーツ城に乗り込んでくるとは…、身の程知らずな奴め！」

数十名の兵士たちが桜たちを取り囲む。

「一人じゃありませんよ…」

声と共に、青年が桜と司令官の間に降り立つ。驚く司令官を尻目に、青年は桜たちに近づく。

「まつたく…、あなたは後先考えずに行動する」

青年は地面に片膝をつき、桜と目線を合わせる。

「桜さん…、大丈夫ですか？」

青年はにつこりと微笑んだ。

「…い、いつたいあなたたちは？」

目の前の青年も自分を知っているようだ。彼らから感じる時の流れはこの時代のもの…。つまり、過去から桜を追つてきたわけではなく、桜と同じ時代の住人だということだ。

「さて…。桜さんを連れて逃げますよ」

青年の意外な言葉に、女性は反論する。

「いやだ…。こいつら…殺す…」

女性に怒りの炎が再び燃え上がる。言葉も先ほどの女の子っぽい喋りから片言になつていて、怒りによつて我を忘れているのだろうか…。だが女性は、何かを思い出したかのように発言を訂正した。

「あ…、人を傷つけることはいけないことだから…、死なない程度に痛めつける！（汗）」

…、じつに妙なセリフである。

「えつ……」

しかし、桜はそのセリフに聞き覚えがあつた。それは、過去においてある女の子がよく使つていた言葉……。

「ま、まさか……」

桜はジッと女性を見つめた。

その女性に変化が現れた。額に真っ赤な宝石が現れ身体が盛り上がる。そして、それは徐々に動物のよつた姿を形成し、巨大な狼の魔獸となつた。その変化に驚える兵士たち。

「リ、リウムちゃん！」

桜が叫ぶ。その姿は紛れも無く“魔獸リウム”であつた。この魔獸の姿は、暗黒族リウムの戦闘形態なのだ。

「じゃあ、もしかして……」

桜は青年に視線を向ける。青年は髪の毛に隠れた小さな角を桜に見せた。桜は信じられないといった顔をする。

「ア、アクアちゃんなの！」

青年はにっこり微笑んだ。

光竜アクア・マリン。いまは青年の姿をしているが、れつきとした竜族であり、過去では如月家のペツト的存在だった。桜はアクアといつも一緒に行動していたのだ。

そんなりウムとアクアが目の前に、しかもこんなに成長した姿でいる。それは信じられないことであつた。

「桜さん、立てますか？」

アクアが痛々しそうな桜を気遣う。桜はうなずき立ちあがみつとするが、よろけてしまう。

『こんなに傷だらけ……』

アクアは、身体の何ヶ所も包帯が巻かれ、アザだらけの桜を抱き上げた。

「リウムさん、なるべく殺さないようお願いします」

アクアは、すでに戦闘形態になつているリウムに声をかける。リウムはしばらく考えて結論を出す。

「…、努力する…（汗）」

アクアは苦笑するしかなかつた。実際、アクアたちは聖界の運命を左右するほどの力を持っている。その力は精靈神に近いとされ、一般の精靈族が何万人集まろうがアクアたちには勝てないだろ。リウムも手加減をして闘うことに慣れておらず、まさに“努力する”しかなかつたのだ。

ルチルクオーツ軍がリウム目掛けて攻撃を開始する。しかし、攻撃や精靈術、すべてにおいてリウムの強大な魔力に阻まれ傷一つ付けることもできない。いや、近づくことすらできないのだ。

「ど、どうこうことだ…」

田の前の出来事にただ驚愕するだけの司令官。天空族との闘いでは感じたことのない圧倒的な力の差を感じていた。

そのとき、黙つて兵士の攻撃を受けていたリウムが突然暗黒族の姿に戻つた。

「リウムさん？」

アクアにもリウムの意図が理解できなかった。リウムは完全に戦闘形態を解除したのだ。桜への仕打ちに怒り、自ら戦闘形態となつて闘おうとしていたリウムが、いつたいなぜ…。

「……、帰る…」

いきなりリウムが、アクアに向かつてそう言つた。

「何が――――――――！（ずが――――――ん…）」

アクアが叫ぶ。

「だつて、こいつらつまらないんだもん…」

リウムはすでに当初の目的、桜の仕返しをするという理由を忘れているようだつた。

唚然とする桜。そういえば、過去にいたときからリウムの意味不明な行動は時々見受けられた。リウムは、まったく変わつてないようだつた。

「リウムさん、あなたはどうしてそんないい加減なんですか――

！」

アクアが涙目で訴える。

そんな漫才のような二人を見て呆然としていた司令官は、我に返り、兵士を再編成するのだった。桜たちの周りを数百名の兵士が取り囲み、城壁から弓兵、精霊術士が三人に狙いを定める。

「ふつふつふ、逃げ場はないですよ」

司令官が勝利を確信したように微笑む。

「そいつらはいい…、フローライトを狙え！」

司令官の号令により、桜目掛けて上空から無数の矢と攻撃の精霊術が降り注ぐ。しかし、それもアクアの精霊力によつて阻まれる。

「フローライト…。フローライトって誰のことですか？」

降り注ぐ攻撃を無視してアクアが考える。

「あ～、フローライトは～私の名前…」

そんなことを言つている場合じやないと思いつつも、桜はその問い合わせに答える。

「え～、桜お姉ちゃん、フローライトつていつんだ～」

その会話にリウムも参加する。緊張感まるで無しである。

「何なんだ、こいつらは――――！」

司令官の怒りにも似た叫びが城内に響くのだった…。

第5話 家族のきずな

「ええーい、まだ賊は捕らえられんのか……！」

城内の騒然とした雰囲気に、ルチルクオーツ王が焦りを見せる。何者かに城内へ侵入され、すでに30分以上経過していた。たった2名の賊に、第四聖界クリスタル最強を誇るルチルクオーツ軍が軽くあしらわれているのだ。焦りというより、恐怖が湧きあがつてくる。

『ま、まさか天空族の精鋭……』

ルチルクオーツ王の顔が蒼白になつてているのが目に見えてわかつた。

王座の間の扉がゆっくりと開く……。近衛兵も賊討伐に向かわせたため、王座の間はルチルクオーツ王一人である。

「…お久しぶりね、ルチルクオーツ王」

そこに現れたのは、近衛でも、賊捕獲を知らせにきた兵でもなかつた。背に一对の純白の翼がある美しい女性……。

「て、天空神…サファイア…」

驚愕するルチルクオーツ。まさか天空神本人が現れるとは思わなかつたのだ。

「…なに用だ！」

動搖を悟られないように、威厳を持つて言葉を発する。

「あ、最初にお断りしておきます……。外の一人は天空界となにも関係ありませんので」

優子はっこりと微笑む。

「本題に入ります。今日は桜ちゃんを帰してもらひにやつて来ました」

打つて変わつて真剣な表情でルチルクオーツを見つめる。

「何をバカな……」

そのとき、ルチルクオーツは天空神サファイアの後ろに、人影が

あることに気づいた。その姿にルチルクオーツは見覚えがあった。城に残る古い記憶石を再生した際、映っていた人物。この精靈界第4聖界を創造した、精靈神ショウとそのパートナーアリスの姿だったのだ。

『しめた…』

ルチルクオーツは微笑する。

「ショウさま、アリスさま。天空神は嘘を言つております。…現在、我がルチルクオーツ国は天空族に侵略をされ…」

ルチルクオーツは事実と異なることを言つてでも、ショウとサファイアを闘わせようとした。アウインの勇者であるショウなら、困っているものを見過こせないと考えたからだ。

ショウがゆっくりと王座へ歩み寄る。

「おお～、御分かりいただけましたか。このルチルクオーツ国は侵略により長期の防戦を余儀なくされ…」

しかし、ショウの様子がどこかおかしいことに気づく。

「…」このままでは、ルチルクオーツ国は…。いや、あなたさまが創造された、このクリスタルは…」

ショウが無言でルチルクオーツ王に近づく。

「なつ！」

その表情を見てルチルクオーツは絶句した。ショウはまるで鬼のような形相でルチルクオーツを睨んでいたのだ！

「どがーーーーん！ 突如、頭上で爆音が聞こえる。

修練場に城壁の一部が多数降り落ちてくる。兵士たちはパニックとなつた。

「あそこは…」

司令官が城を見上げる。一部から煙が昇っている。そこは紛れもなく王座の位置だったのだ。

そして、司令官は信じられない光景を見た。その場所から、人が飛び出してきたのだ。重力に逆らわず落下する人影。

「へ、陛下！」

それはまさしくルチルクオーツ王その人であった。

ルチルクオーツ王は、団子状態となっている兵士の中に落下する。微量な精靈力により落下速度を押さえ人ごみの上に落下したため命に別状はないようだが、全身のいたる所を骨折しており自ら動けないようだった。そしてその頬は、みごとに拳の形に腫れ上がっていた。

「な、なんだ？」

突然の出来事にアクアマリンも驚く。まさか、空から国王が降ってくるとは夢にも思わなかつたのだ。兵士たちも桜を攻撃するどころではなかつた。

いつたい何が起こつたのか理解できぬいでいたが、そのことに最初に気づいたのはリウムだつた。

「……マスター——」

リウムが上空から軽やかに降りてくる人物に向かつて叫んだ。アクアたちのそばに降り立つたのはアウインの勇者ショウの姿であった。

「マスター——」

リウムが涙を流しショウに抱きつぐ。この時代、ショウはすでに死んでいるため、リウムたちには久しぶりの再会であつた。

「……ショウさま」

アクアは最初このショウが、覚醒したファリスの息子ショウだと思つたが、どうやらそうではなさそうだ。考えてみれば、桜がここにいる以上、過去のショウが現れても不思議ではない。

ショウは成長したアクアやリウムを見ても驚きはしなかつた。ショウには、この時代に着いたときから精靈力により感じていたのだ。そう、桜が虐待を受け、傷だらけなことも……。

「桜……」

ショウが桜に近づく。アクアに抱きかかえられていた桜は地面に下ろされる。

「桜…、もう大丈夫だ…」

ショウがそっと桜の頬に手を添える。

桜は、必死でこりえていた感情を爆発させ、大声で泣き始めた。

「わあ…………、わあ…………あ…」

ショウの胸で泣く桜を、優子は王座の間の崩れた壁から見ていた。
「それじゃあ、わたし帰るね お兄ちゃんによろしく
先ほどまでの天空神としてではなく、友達としてアリスに挨拶をする。

「…会わないの？」

優子が少し寂しそうな顔をしたのを、アリスは見逃さなかつた。
「うん 感動の再会は過去のわたしに残しておかなくちゃ」
後ろ髪を引かれる思いを残し、優子は翼を広げ飛び去つて行つた。
やれやれといった面持ちで優子を見送るアリス。

「…さて、そろそろあたしも行かないと…」

アリスは、ラルドが自分をショウに着かせた意味を理解した。

「アクアとリウムじゃー、暴走したショウを止められないもんね

」

アリスは苦笑する。

ショウは桜に回復の精霊術かける。桜は見る見るうちに回復し、
その傷も一つ残らず消えた。

「パパ…、ありがと…」

泣きやみ、ショウを見上げた桜はぎょっとした。いつものやさしく、穏やかなショウからは考えられないほどの形相で司令官を睨んでいたのだ。桜は恐怖すら感じた。

「アクア…、桜を頼む…」

ショウが兵士たちと向き合つ。右手を胸の位置にかざすと、甲にあるアウインの紋章が輝きだす。ショウはそれを一気に振り下ろした。

ショウの前方に巨大なアウインの紋章が現れる。その紋章が形を

変え、ショウの身体を覆う鎧と化した。続けてショウが前方に手を突き出すと、光が集まりそれが剣を形成。ショウが握ると、それは輝ける聖剣クリソベリルとなつた。

「てめ――ら、ぶつ殺――す！」

とても勇者とは思えないセリフだ。ショウの怒りが頂点に達し、精靈力が竜巻のように上空へと昇る。大地が震え、大量の光の精靈力が集まる。

アクアはこんなに怒り狂うショウをはじめてみた。このままでは、この大陸は…、いや聖界 자체が消滅してしまつ恐れもある。

「ショウさま！ おやめください！」

しかし、アクアの叫びもすでにショウには届かなかつた。

「ショウさま――――！」

「は――い、そこまでよ――」

場に似合わない声が聞こえたかと思うと、巨大な衝突音と共にショウを中心に爆煙があがつた。

唖然としているアクア。精靈力の暴走は收まり煙が晴れる。そこにはアリスの巨大な100tハンマーに押しつぶされているショウの姿があつた。

「なあ――――――！（どびつくり）」

目を丸くするアクアたち。

その場にいたものすべてが、最強状態のショウを一撃で倒したアリスに恐怖する。

こうして“アリス最強伝説”に新たな1ページが加わった…（笑）。

ルチルクオーツ軍はショウとアリスのはちゃめちゃに戦意が失せ、降伏するのだつた。ルチルクオーツ王は精靈神ファリスの命により王位を剥奪。混乱が回復して新たな王が即位するまで、アクアとりウムに国の政治が任せられた。

そして…。ショウとアリスは現代へと戻ってきた。もちろん桜も一緒に…。

如月家への帰り道…。夜も更け、あたりは真っ暗だつた。

「パ…、ショウ…さん。わたしはこの時代の精霊じゃありません…、良いのですか？」

桜はすでに三歳児の姿になつていた。

「なんだ、桜は俺たちと暮らすのがいやなのか？」

ショウが意地悪な質問をする。

桜はそれを必死で否定する。

「ち、違います。ただ、歴史に影響が出るんじゃないかなつて…」

「大丈夫、大丈夫！」

アリスが笑顔で答える。

「時空神つておじいちゃん（ラルド）でしょー。何も考えてないつて」

かなり無責任なセリフである。

ショウが桜の頭を撫でる。

「それに、桜の時の能力はその腕輪で封印させてもらつたからな。問題ないよ」

桜の時の能力はショウが作った腕輪によつて封じられた。それでも三歳児の姿になれているのは、ショウの作った腕輪の能力である。桜は時の能力を一切使つていない…。

「はい…」

桜は腕輪を見た。これで能力の連続使用により倒れることもないだろう。

「ほら、家が見えてきたぞ 桜…、お前の家だ…」

ショウは桜の背中を押した。

ショウに促され、桜は如月家を見る。家の前に、ぽつんと人影が佇んでいた。じつと何かを待つているような人影…。

「ママ…」

桜が思わず声を上げる。

その声に驚いたよう、優子が「ひへ」を呟く。

「…桜ひへ…お帰りな…」

優子は涙を浮かべゆっくとしゃがんだ。

「ママ…」

桜が優子に飛びつぶ。

「ママ、ママ…」

桜は泣きじゅくった。

如月家を出たとき、桜は一度とあの頃には戻れないこと諦っていた。だが、桜は帰つて来たのだ、この懐かしい如月家。

そんな優子と桜を見て、ショウは胸がこみひこみになつた。

「ねえ…」

不意にアリスがショウに声をかける。

「優子つて…、人間族じゃなかつたの？」

思い出したように問いかける。

「はあ～？（大汗）」

呆れるショウ。まさに感動の場面で、ぜんぜん関係のない問い合わせであつた。

おじまー…

第5話 家族のきずな（後書き）

あとがき

桜は、文字だけ4コマに登場するキャラクターで、Crystal Legend 本編には登場しません。

登場したての頃は、ショウを監視するだけの（ショウにはバレバレ）、本当に謎のキャラクターでした。で、4コマとして短編小説を書き始めたらいつも感じになっちゃいました。（結局は全5話）いや〜、桜にはこんな設定があつたんですね〜

また、4年後には「ルチルクオーツの事情」って短編小説を書きました。引き続き更新するつもりですので、是非ともお読みください。

2008/03/25 Crystal

「フローライト」 2001/11/15 ~ 2001/11/24
連載作品（全5話）

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal Legend 7-2」 「トルマリンの胎動」、「Crystal Legend 7-3」 「はじまりの時代」、「Crystal Legend 7-4」 「もしかして怪談？」
超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」

なんぢやうプラネット シリーズ 「なんぢやうプラネット」
美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談？」
4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ

第6話 未来からの通信（前書き）

2005/12/07～2006/01/11 連載作品（全7話）
「桜のひみつ（フローライト）」を書き終えてから4年後。ルチル
クオーツって、あれからどうなったんだろうな」と考えながら書い
た短編小説です。

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal
Legend 7-2」 トルマリンの胎動」、「Crystal
al Legend 7-3」 はじまりの時代」、「Crystal
tal Legend 7-4」 もしかして怪談？」
超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰
編」

なんちゅらプラネット シリーズ 「なんちゅらプラネット」
美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談？」
4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ
ート劇場」

いまからそれほど遠くない未来……。人間界と呼ばれている世界は、十四人のジュエルナイツが起こしたジュエルウォーズに巻き込まれ、滅びの時を迎えることになる。

だが、起こるであろう滅亡を予期していたジュエルナイトの一人、奇数月十三月の騎士ショウ（クリスタル）によつて、人間界に住む全ての生物は、新たに創造された聖界へ移されていた。それが、後に精靈界第四聖界“クリスタル”と呼ばれる聖界である。

第四聖界クリスタルには、人間族のほか、精靈族や魔族も別け隔てなく暮すことのできる平和な聖界であつた。しかし、数千年を経たころには、人間族と呼ばれた種族の数は減少し、精靈族や魔族も以前のような強大な力を失つていた。

また、いつの時代にも、争いことは起こるものである。各国は、より強力な兵器を開発に鎬を削り、飽きることなく戦争を続けていた。“フローライト”と呼ばれる少女も、そんな最中に生を享けた。フローライトには、生まれながらにして、時間や空間を操ることのできる時空力が備わっていた。その時代では失われたはずの、奇蹟の力である。フローライトは、第四聖界クリスタルの大國ルチルクオーツの王によって、とある計画を強要させられることになった。それは、時空力を使って過去へと渡り、この聖界を創造した伝説の精靈神ショウをこの時代に連れて来ることであった。

ルチルクオーツ王は、伝説の精靈神の力を借り、全ての国を支配しようと考へたようである。フローライトは、その命令に逆らうこともできず、約五千年前の人間界にやつて来ていた。そこで、目的であるショウと接触し、未来からやつて来た娘と偽つて、如月家へ入り込んでいた。

本来、十一歳のフローライトだったが、油断するであろうという理由から、普段は三歳児の姿をしている。フローライトは、“桜”

と名付けられ、本当の娘のように可愛がられることになった。

元の時代では想像もできなかつたほどの、平和な日々が続いていく…。

ルチルクオーツ王の命令からも解放されたフローライトは、いまは如月桜として、ショウたちの元で幸せな毎日を送つていて。

幼稚園から戻つてきた桜は、リビングのソファーに座つていた。この時代の両親であるショウと優子は、仕事へ出ており夕方にならないと帰つてこない。また、いつもは家にいる綾菜たちも、どこかに出かけたのか姿が見えない。

することのない桜は、仕方なくテレビの電源を入れる。しかし、興味の惹く番組もなく、すぐに電源を落とした。

「はあ～…。たいくつだよお～…」

桜は、大きなため息をつく。少し前であれば、精靈神の能力を探るため、隠れてショウを監視するところだつたが、いまではそんな必要もなくなつた。第一、ショウには、桜が十一歳の精靈族で、未来からやつてきたこともばれていた。ショウは、全てを承知のうえで、桜を住まわせてくれている。その信頼を裏切ることは、決してできるはずもなかつた。

「あれ、桜さん…」

扉が開く音と共に、男の子の声が聞こえてくる。だが、振り返つてみても、そこには誰もいない。

「帰つてこられていたのですね」

その瞬間、小さい塊がソファーに飛び乗つてくる。それは、純白の毛並みをした仔犬であつた。

「おかえりなさい」

純白の仔犬は、ふさふさの尻尾を激しく振りながら、嬉しそうな表情で桜に挨拶をした。

「アクアちゃん、ただいま」

桜は、仔犬を抱き寄せて、膝の上に乗せる。光竜アクアマリン…。

仔犬にしか見えないが、これでも歴とした精霊界の童族である。

「綾菜ママは、お出かけなの？」

ほとんど留守をすることのない綾菜だったが、桜がやって来る以前は、仕事の関係上ほとんど家にいなかつたという。

「綾菜さんは…。どこかと通信した後、部屋にある冷蔵庫の中へ…入つていきました…」

アクアは、困ったような表情で、あははっと苦笑する。冷蔵庫の中という説明で、綾菜の向かつた先は特定できた。

ショウと優子の母親である如月綾菜の職業は、じこと別の世界“天空界”の神様である。天空神サファイア…、それが綾菜の真名であつた。また、綾菜は、全ての聖界を創造した十四人のジュエルナイツの一人、奇数月九月の騎士“サファイア”でもあるという。綾菜の部屋にある冷蔵庫は、みんなには内緒だが（当然、知られているとは思うが…）、時空間を捻じ曲げて天空界に繋がつているのだ。

「綾菜ママ…、なにがあつたのかな…」

アクアによれば、綾菜はかなり慌てた様子で天空界へ向かつたという。神様の御力が必要なほどだから、天空界で大きな事件が起つたのではないだろうか。桜は、綾菜の身を案じるように咳く。そこに、もう一人の住人がリビングに現れた。

「綾菜…。…………、死…んだ…？」

突然、とんでもないことを呴く八歳ぐらいの少女。頭には垂れ下がつた獸耳、お尻りからは可愛い尻尾が出ている。彼女は、鉱物生命体暗黒族の少女、リウムである。

リウムの額には赤黒い石が憑いており、それが暗黒族の本体とされる。つまり、額の暗黒石を碎かれない限り、リウムに死は訪れない。肉体が滅んだとしても暗黒石は残り、他の生命体に取り憑くことで復活を果たす。リウムも、数ヶ月前に復活したばかりなので、感情が欠けているどころか喋る言葉も片言である。もちろん、リウムの言葉に、悪意は込められていない。

「綾菜さんが死んでしまつたら、それこそ一大事ですよ…」

言葉通りの意味に捉えたのか、アクアは大きなため息をつく。それを見ていたリウムは、無表情にぼそっと呟いた。

「じゃあ…、死ね…」

その瞬間、リウムの身体が大きく膨れあがる。全身からは漆黒の体毛が生え、全長が四メートルはあるつかといつほどの四つ足の獣となつた。リウムの成長過程にあつた、魔獸と呼ばれる姿である。

「がおおお～、がおがおお～～～ あ～～～ん…」

何を思ったのか、リウムが大きく口を開ける。慌てて逃げようとするアクアに狙いを定め、目にも止まらぬ素早さで喰らい付いた。

「はむはむ、うまうま」

魔獸となつたリウムは、アクアを咥えたまま、嬉しそうに口を開かしている。リウムの口の中からは、アクアの悲鳴にならない叫び声が聞こえてくる。

こいつたドタバタは、この如月家では日常茶飯事である。はじめのこirosは驚いていた桜も、いまではすっかり馴染んでいた。

「あ～…、リウムちゃん…。アクアちゃんを、飲み込んだダメだからね～」

桜は、リウムの遊びに念を押す。以前、本当に飲み込んだことがあって、吐き出させるため大騒ぎになつたことがある。桜しかいなことを考えると、アクアが胃で消化されるまでに助け出すのは困難だと思われた。

桜は、リウムのことを“ちゃん”付けで呼んでいる。これは、どんなに八歳に見えようが、リウムは生まれて半年も経っていないこと、桜の本当の年齢が十一歳であることが関係する。リウム自身も、桜のことを理解しているのか、“桜お姉ちゃん”と呼んでいた。リウムは、桜を強面で睨みつける。慣れない者であれば気を失うほどの恐怖を感じるだろうが、魔獸としての顔が恐いだけで別に怒つてはいるわけではない。

「ん～～～

」

桜のお願いを理解したのか、リウムは可愛い声で返事をする。その瞬間、“バキボキッ！”といった骨が碎けるような音が、リウムの口から聞こえてきた。

「……、……あ

リウムは、目を丸くして“しまった！”という表情で口を開ける。どうやら、歯む加減を間違えてしまったようだ。

「う、う、う……」

リウムの口から吐き出されたアクアは、よだれで全身がべちゃべちゃである。苦しそうに痙攣し、心成しか顔色も優れないようである。桜の診たてでは、全身の複雑骨折といったところだろうか…。

「あははっ…」

その様子に、桜は苦笑するしかなかつた。光竜の生命力であれば、この程度で死ぬことはない。数時間もすれば、ほおつておいても全回復するであろう。こういったドタバタは、本当に日常茶飯事なのだ。

そのとき、桜のポケットから目覚し時計のアラームのよつな音が聞こえてくる。その音を聞いた桜は、心底驚いたような表情をした。桜は、ポケットから一つの宝石を取り出す。宝石は、音に合わせて小刻みに点滅を繰り返していた。

この宝石は、五千年先の未来から、ルチルクオーツ王が桜に指令を出すときにつけていた通信機のようなものである。ルチルクオーツ王が失脚してからは、ただの一度も鳴ることがなかつた通信機…。通信機の音は、桜にとつて辛い記憶を呼び起こすものだつた。

しかし、いつまでも通信を無視しておくわけにもいかない。覚悟を決めた桜は、宝石の表面に触れ、未来との回線を開いた。

『あつ、桜さんですか～？』

宝石からは、ルチルクオーツ王ではなく、若い男性の声が聞こえてくる。その声に心当たりがなかつたため、桜はおもわず呆然としてしまう。すると宝石の声は、桜の戸惑いを感じ取つたように、己の正体を名乗つた。

『ボクです、アクアです。光竜のアクアマリンですよ』
その内容に、桜は驚いてしまう。その声は、五千年先の未来で出
会った、かつこよく成長したアクアのものであつた。

第7話 ふたたび未来へ

「光竜、アクア…マリン…ですか？」

通話の内容が聞こえたのか、意外に早く復活したアクアは、怪訝な顔をする。自分自身がここにいるのだから、通話先の相手が“光竜アクアマリン”であるはずはない。

「ボクの名前を騙るなんて…、いつたい何者ですか！」

アクアは、桜の持つ宝石めがけて、牙を剥き出しに叫んだ。

『…………。もしかして、その時代のボクがいるんですか？』
未来のアクアは、少し驚いたような声で呟く。通話といえ、過去の自分と接触を持つことは、あまりよろしくはない。未来のアクアが対応に困っていると、宝石から別の声が聞こえてきた。

『なにに、ちびっこいときのアクアがいるの？』

あまり聞き覚えのない女性の声に、アクアは畠然としてしまう。すると、女性は、信じられないことを口にした。

『わたしは、暗黒族のリウムだよ。ちびっこアクアちゃん、お久しぶりだね～～～』

その名前に、アクアはギョッとしてしまう。慌てて振り返り、いつの間にか人型に戻っていたリウムを見つめた。リウムは、べつに驚いた様子もなく、桜の持つ宝石を見つめている。

『な、なにをバカな…。リウムさんは、ここにいますし…。第一、リウムさんがそんなに喋るはずないじゃないですか～～』

成長したりウムを知らないアクアは、もつともなことを口にする。確かに、いつも片言のリウムが普通に喋るなど、この時代のアクアには想像もつかないだろう。

「あの～、アクアちゃん…。いや、こっちはアクアちゃんね…」

桜の言葉に、二人のアクアが反応する。

「え～っと、通信してきている一人は…。五千年ほど未来にいるアクアちゃんとリウムちゃんなの…」

それを聞いて、アクアは目を丸くして驚く。ただし、相変わらず無表情のリウムは、いたつて平然としていた。

「いまはこんな（三歳児）姿をしてるけど、本当のわたしは十一歳だつて知ってるよね……？」

桜の問いかけに、アクアは思い出したかのように「クリと頷く。「わたしが未来の精霊界からやつてきたことは知ってるよね……？」その問いに、アクアは顔を激しく左右に振つて否定した。

「あ……れ？」

桜は、てっきり自分の正体がみんなに知られているものだと考えていた。最後に未来へ渡つたとき、如月家では、いなくなつた桜を捜すため大騒ぎとなつていて（前作「桜のひみつ」「フローライト」参照）。そのことで、ショウから説明がされたものだと思っていた。ちなみに、ショウ以外で桜の正体を知つている者は、時空神であるラルドと、一緒に未来へ行つたアリスぐらいである。ショウのことだから、おそらく“面倒……”といった理由で、桜についての説明をしなかつたのだろう。桜の正体が何者であろうとも、一緒に住んでいるショウたちは、誰も気にしない。桜は、これまで通り、ショウと優子の娘として暮らせばいいのだ。

『で……、桜さん。お話し……よろしいでしょうか？』

未来のアクアは、話が途切れたころを見計らつて喋りかける。アクアとしても、何の用事もなく、時空を越えてまで連絡してくるはずはない。ルチルクオーツで、桜に関係した何かが起こつたと考えるべきであろう。桜は、気を引き締めて、真剣な表情で宝石を見つめる。だが、アクアが語つた内容は、さらに桜を困惑させるものだつた。

『桜さん……。一度、こちらに帰つて来ていただけないでしょうか』ルチルクオーツに戻つて来い……。アクアの言葉に、桜は小首を傾げてしまつた。

桜は、元々五千年先の未来人である。時空間の影響を考えると、

別の時代にいること自体、危険な行為だといえる。桜が過去にいることで、歴史にズレが生じてしまうことも考えられる。いや…、最悪の場合、時空間が崩壊してしまった可能性もある。未来のアクアが戻つて来いといつのも、当然のことだといえるかもしない。

時空間崩壊の危険があるにも関わらず桜がこの時代で生活できているのは、時間や空間を操る神ラルドが許可しているからである。なぜ、許可が出ているのかは、桜にもわからない。ラルドの性格から考えると、おそらく“面白そうだから…”といった理由ではないだろうか。

「で、でも…。わたしは…」

桜は、元の時代へは、一度と戻るつもりはなかつた。桜の居場所は、この如月家である。この如月家から…。シヨウや優子の元から離れるなど、何があつてもお断りであつた。

「わたしは、この時代で暮らしたい…。悪いけど、そっち（未来）へは、絶対に帰らないから…」

桜は、やや強い口調で呴く。桜の本当の両親は、第四聖界で長く続いている戦争に巻き込まれ命を落としていた。未来の世界で桜と係わりがある者がいるとすると、前ルチルクオーツ王に引き取られるまで暮していた孤児院の関係者たちだけである。

『そんなに嫌がらないでくださいよ』

桜の反応を予想していたのか、アクアは苦笑気味に呴く。

『もうすぐ戴冠式があるので、桜さんにしていただきたいのです』

その内容に、桜は驚きの声を上げた。

「た、戴冠式つて…。新しい国王様が決まつたんですか！」

桜を引き取り、奴隸のように扱つていた前ルチルクオーツ王は、天空神サファイアの暗殺や、無許可での時空間転移の責任により国王の座を追われていた。そして、新国王が決まるまでの間、アクアとリウムがその任を代行していたはずである。

『はい。こちら側での話は纏まり、後は戴冠式を向えるだけとなつています』

アクアは、なぜか声を弾ませるように答える。

『その戴冠式に、桜さんもぜひ参加していただきたく、このたび連絡させていただいたわけです』

国王代行という職務から解放されることが、よほど嬉しかったのかもしれない。あちらがわの時代では、アクアが尻尾をバサバサ振つていることだろう。しかし、桜の表情が晴れることはなかつた。『新しい国王様が決まって戴冠式があるのはわかつたけど…』

桜は、脳裏に浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「その戴冠式に、どうしてわたしが呼ばれるの？」

そのような大切な場に呼ばれる理由が、桜には思いつかなかつた。あるとするとなるなら、孤児であつた桜を引き取つたのが、前ルチルクオーツ王であつたことぐらいであろうか…。だが、養子としてではなく、あくまでも桜が持つ時間や空間を操る“時空力”を利用するためであつて、扱いとしては奴隸に近いものであつた。そんな立場の桜に、新国王の即位が関係してくるとはとても思えない。また、王位継承権を持つ貴族たちは、特殊な力を持つ桜に嫌悪感を持ついたため、そのような者の戴冠式に呼ばれるることはありえなかつた。もしかすると、アクアカリウムが、新国王として即位するのであらうか…。そんな疑問をぶつけてみる桜だが、アクアの返事ははつきりしないものであつた。

『とにかく、明日の正午までに戻つてきてください…。詳しいお話しは、そのときにでも…』

それだけ言い残し、アクアは通信回線を切断してしまつ。桜は、再び回線を開こうとしてみるが、通信拒絶されているようであつた。

「えへっと…」

桜は、ジト目で視線をぶつけてくるアクアに苦笑する。ある程度の事情は桜たちの会話を聞いて理解しているようだが、未来の自分が通信してきたことに納得できていないのだろう。

「…と、いうわけだから、ちょっと元の時代に行つてくるね~」

桜は、アクアの視線から逃れるように、ソファーを飛び降りる。「お父さん（ショウ）たちには、心配しないでって伝えておいて…」苦笑いを浮かべながらリビングを出ようとしたが、服が軽く引っ張られるのを感じて振り返った。

「リウム…ちゃん？」

見てみると、リウムが桜の袖をしっかりと握っている。桜は、どうすることもできずに、困り顔で苦笑してしまう。すると、リウムは無表情に呟いた。

「……。一緒に…、行く…」

そして、何を思ったのか、アクアの頭を驚掴みにして持ち上げる。

「アクアも…、……。『はん…』

暴れるアクアを抱きかかえ、おもいつきり絞め上げた。おそらくアクアも連れて行くつもりなのだろうが、言っている内容はいつものように意味不明であつた。

「で、でも。たぶん、厄介事…だよ」

桜には、予感が…いや、そんな確信が持てた。

「それに、同じ時間帯に同一人物が存在すれば、時空間にどういった影響が起こることか…」

このままアクアとリウムを連れて行き、未来の二人と会わせたら非常にマズイのではないだろうか。

以前、ルチルクオーツへ戻った桜を連れ戻しに来たのは、その時代では既に死んでいたショウとアリスであった。そのため、五千年先の未来に行つたとしても、影響は少なかつたと考えられる。しかし、アクアやリウムの場合、同じ時代に同一人物が存在してしまうこととなり、どういった事態が発生してしまうか想像がつかない。できるなら、今回も桜一人で未来へ向かいたいと考えていた。

「大丈夫ですよ…」

そんな桜の考えを、リウムに抱えられたアクアが否定する。

「確かに、同じ人が同時に存在すれば、時空間のバランスは崩れてしまします」

それは、時空力を操る者にとって、一番注意すべき問題である。次元が崩壊してしまえば、全てが無に帰してしまうからだ。そのことは、アクアにも理解できているようだ。

「なら、どうして大丈夫だなんて言つの？」

桜には、アクアが何を考えているのかわからなかつた。もしこの場にシヨウがいたのなら、絶対に止めてくれるはずである。

「とにかく、ボクたちも未来について行きます」

桜が何を言おうとも、アクアの意見はかわらない。桜は、大きなため息をつき、その理由を問いただした。

「だつて……」

すると、アクアは、とんでもないことを口にする。

「これつて、”4コマ”ですか……」

その眩きは、場にいる全てのものを凍らすのに充分な威力を持つていた。そう……、どんなに真面目っぽい物語が進もうが、この作品は“縁柱石4コマ劇場”的外伝である。多少の不具合な設定は、笑つて誤魔化せばいいのだ。

「あ……、それもそうだね……」

アクアの説明に、桜は納得してしまつ。

「うん……、”4コマ”だし……」

どんな事態になろうとも、4コマだから何とかなるだろう。桜がこの時代で暮せているのも、じつは4コマの御都合主義だからかもしれなかつた。

桜、アクアマリン、リウムの三人は、迷いの森の奥に聳える“こだまの樹”へとやってきた。無数の発光体が漂う神秘的な場所である。発光体は、こだまの樹から発せられる精靈力が集まつた塊で、一般的には“オープ”と呼ばれていた。

未来への時空間転移は、桜の時空力だけでは不可能である。そこで、現在でも人間界と精靈界を繋ぐ扉であるこだまの樹の精靈力を借りて、未来へと時空間転移するわけだ。

こだまの樹は、精靈界では神聖樹“クリソプレーズ”と呼ばれており、いくつもの聖界を繋ぐ扉の役割を果たしている。つまり、クリソプレーズ自体に時空力が宿つており、うまくコントロールすれば時を越えることも可能であった。もちろん、時空力を持たない者が過去や未来へ時空間転移することはできない。時空力を持つ者は、長い歴史の中でも四人しか存在していなかつた。

時空神であり、ジュエルナイトの一員であるリアン（ダイヤモンド）とラルド（エメラルド）。精靈神であり、同じくジュエルナイトの一員のショウ（クリスタル）。そして、フローライトこと桜の四人である。

神の力を有するショウたちに、時空力が具わつてているのはわかる。だが桜は、時空力は持つても、ただの一般人である。さらに、扱える時空力の量も少なく、身体の周りの時空間を歪めて子供の姿となつたり、数秒ほど時間を止めるぐらいしかできなかつた。

それでも、時空力を持った者は、たいへん希少な存在である。桜も力こそ弱いが、間違いなく時空力を操る四人のうちの一人であつた。

「じゃあ…、いくよ…」

桜は、時空力を高めながら、こだまの樹の幹に手を添える。すると、漂つていた無数のオープが桜の手元に集まり、未来の精靈界へ

と繋がる光の扉が開いた。

「二人とも、わたしから絶対に離れないようにしてね…」

そう言つて、桜はリウムに手を差し出す。リウムが手をギュッと握り締めるのを確認して、桜は光の扉へと突入していった。

光の流れに乗り、桜たちは一瞬で五千年の時を越える。気づいたときには、ルチルクオーツ国の中間に聳える神聖樹クリソプレーズの前に立つていた。

「ここって、精霊界…なんですか？」

リウムに抱っこされたアクアは、巨大なクリソプレーズを見上げて、そんなことを呟く。目の前にあるクリソプレーズは、どう見ても迷いの森にあつた“こだまの樹”なのだ。さらに、周りを見渡してみても、さきほどまでいたこだまの樹の広場としか思えない。本当に、時空間転移で、未来の精霊界へやつて来たのだろうか…。

「このクリソプレーズは、精神界ショウ（クリスタル）さまが第四聖界を創造されたとき、崩壊する人間界から移植されたと伝わって…、えつ？」

説明を始めた桜の視界が、突如真っ暗になる。何者かに目を塞がれているようで、背後にどことなく暖かな気配を感じた。

「だ……れだ？」

目隠しした何者かは、優しい声で桜に囁く。次の瞬間、我慢がきかなくなつたのか、桜をおもいつきり抱き上げた。

「うーん、桜ちゃん 会いたかったよーーー」

慌てて振り返ると、もの凄く美人な女性が桜に頬擦りをしてきた。

「サファイア…さま！」

桜は、思ひがけない人物の登場にギョッとしてしまう。彼女は、前ルチルクオーツ王の命令で桜が暗殺しようとした、天空界の神“サファイア”であった。

「つて、ルワーさん！ この時代では、ルワーさんが天空神さまをやつてるんですか————！」

アクアは、あまりのことに驚きの声を上げる。それを聞いたサフアイアは、アクアの頭を鷲掴みにしてリウムから奪い取り、そのまま地面へおもいっきり叩き付けた。

「ぎゃふん！」

アクアは、まるでカエルが潰されたような声を上げる。

「ルワーさん、何をするんですか――！」

ようよろと立ち上がったアクアは、抗議の視線をサファイアにぶつける。その途端、サファイアにギロリと睨まれ、涙目になつて尻尾を股下へ隠す。そこに、リウムがテトテトと駆けより、サファイアにギュッと抱きついた。

「……。ゆう…、お姉ちゃん」

リウムがそう呟くと、サファイアはにっこりと微笑みを浮かべる。

「やっぱり、リウムちゃんはわかつてくれたのね～」

サファイアは、しゃがみ込んでリウムの頭を撫でる。

「どつかの“犬”とはえらい違い…」

ジト目でアクアを睨みつけ、そんなことを呟いた。

仔犬のように見えるが、アクアは精靈界で聖獸とされる光竜の一族である。犬扱いされてムッとしたアクアだったが、サファイアとリウムの会話は、それを忘れさせるだけの衝撃があった。

「えっ！ ゆ、優子さんなんですかっ！」

口をあんぐり開けて驚くアクア…。まさか優子が天空神の職に就いていようとは、夢にも思わなかつただろう。

「やつと氣づいたようね…」

サファイアこと優子は、呆れたようにため息をつく。

「まあ～、なりゆきでお母さんの跡を継いじゃつて、いまでは天空神サファイアなんかをやつてたりします」

背中に純白の翼があつて、顔もルワーそつくりなのだが、喋り方や雰囲気は間違いなく優子そのものであつた。

「それで…。サファイアさまは、どうしてここに？」

桜たちがやって来ることはこの時代のアクアたちから聞いていた

のだろうが、天空神自らが出来向いてくるなど普通では考えられない。もちろん、この時代に優子の身を脅かすほどの精霊族は存在しないが、それでも天空族の長として無用心すぎるのではないだろうか。

「え~っと…、サファイア…さま?」

優子は、桜の問いに答えようとせず、なぜかムツとしている。

「ゆ、優子…さん?」

今度は、瞳に涙を浮かべ、悲しそうな表情をする。

「…お、お母さん?」

その途端、満面に笑みを浮かべ、桜をギュッと抱きしめた。

「桜ちゃん、桜ちゃん」この前はお話しもできなかつたから、久しぶり(五千年ぶり)に会えて嬉しいよ~~~~~」

優子の激しい愛撫に、桜は苦笑してしまつ。ちなみに、優子が言つてゐるこの前といつのは、ルチルクオーリ王の命により、桜が優子を暗殺しに向かつたときのことであつた。

「で、わたしの愛しいお兄ちゃんは、どこにいるのかな~~~~~?」

優子は、辺りを見回し、ショウウの姿を捜す。一緒に来ていないとを知らせると、優子はこの世の終わりかといつほどの落ち込みを見せる。桜は、どうして優子がここに現れたのか、なんとなく理解できた。

「まあ、しかたないか~。今回は、桜ちゃんがメインのイベントだ

し…」

優子は、いじけながらそんなことを呟く。

「さて、気を取り直して、ルチルクオーリの街に向かいましょうか

」

そう言つて、桜の手を取り、森の外へ向かつて歩き出やつとする。

「ちょっと…、優…、お母さんも一緒に行くの…」

人間界の宗教画にあるような天使の姿をしている優子が、そのまま精霊族の街に向かえば大騒ぎとなるのではないだろうか…。桜は、国を護る兵士たちに、自分たちが取り囲まれてゐる場面を想像して大汗をかいた。

「大丈夫だよ」

桜の心配を他所に、優子は平然としている。

「最近は、ほとんど毎日ルチルクオーツに出入りしてるし。それに……」

優子は、一瞬だけ口ごもり、とんでもない内容を呟いた。

「街には、『緑柱石の分館』も建設されたから……」

困ったように苦笑する優子。桜は、開いた口が塞がらなかつた。緑柱石ルチルクオーツ分館……。どうやら、前回の事件が解決した後、事務局長にして絶対無敵、究極の非常識であるラルド（エメラルド）によつて、建設が強引に進められたらし。

「緑柱石って……、どこにでも建てますよね……」

アクアの呟きが、全てを語つてゐるようであつた。確かに、非常識の拠点が街中にあれば、背中に翼のある天空族の一人や一人、大したことはないかもしれない。

「そういうことだから、何も心配はいらないのよ」

優子は、にっこりと微笑んで、桜の頭を優しく撫でた。

「ところで……、アクアちゃん……」

不意に、優子がアクアに声をかける。近づいてきたアクアを抱き上げ、どういうわけかお腹を撫でまわす。

「ひやっひやひやはあ～！ ゆ、優子さん、な、何をするんですか～！」

弱いところを触られ、くすぐつたがるアクア。その様子を見て、

優子はニヤリと嫌味な笑みを浮かべた。

「お母さんから聞いたんだけど……、光竜の生き胆つて……美味しいんだつてねえ～～～～～」

その瞬間、優子の瞳がピカッと光る。アクアの顔から血の気が引き、壊れた機械のようにガタガタと震え出した。

「ジジジ、ジユエルナイト～～～～～」

アクアは、引きつった顔で叫び声を上げた。

ジユエルナイツの間には、『光竜の生き胆は不老長寿の秘薬で美

味”とこうテーマが広まっている。ジュエルナイトたちは、アクアと顔を合わせるたびに、“光竜の生き胆は美味しい”と囁いてくる。最終的には「冗談だと笑って解放してくれるが、アクアを見つめる瞳は、まさに獲物を狙う肉食獣のようであった。

優子は、綾菜の跡を継いで天空神サファイアとなつた。それは、天空神の職だけではなく、奇数月九月の騎士“サファイア”的力を引き継いだのではないだろうか…。その予想が正しければ、この優子はアクアにとつて危険である。

「いやだな～、冗談だつて～」

怯えるアクアに、優子はニッコリと微笑む。だが、その視線は、アクアのお腹を見つめたままであつた。

「ストレス…、ダメ…、肉…、まずくなる…」

さらりと恐ろしいことを呟くリウムに、アクアはさらりと怯えてしまう。すると、優子がハツとしたように頷いた。

「え～っと…」

桜は、困ったような表情をして、優子からアクアを回収する。アクアは、滝のような涙を流しながら、桜にしがみ付く。

（アクアちゃんは、わたしが護らなくちゃ…）

桜は、苦笑しながら、そんなことを考へるのだった。

第9話 なつかしの我が家

ルチルクオーツの街へ入った桜たちだが、天使のような優子の姿を見て驚く者はまったくなかつた。いや…、むしろ優子を見つけては、嬉しそうに挨拶をしてくる。まるで、有名人にでも遇つたかのような反応である。

実際に天空界の神様という立場なのだから、もの凄い名人であることには違ひないが、少し前まで戦争状態にあつた敵国の代表者を平然と迎え入れているのはどうしてなのだろう…。桜は、その理由がわからず、しきりに小首を傾げていた。

ちなみに、戦争状態といつてもルチルクオーツ側が一方的に戦いを仕掛けただけで、天空界側は戦争をしているという認識はまったくなかつた。優子は、天空界に攻め込んできた軍勢を、経験の足りない天空兵たちの戦闘訓練と考えていた。

もともと、精霊族と天空族の間には、基本戦闘能力に天と地ほどの差がある。それは、約三万のルチルクオーツ軍を相手に、見習いの天空兵約三百で相手をしていたほどである。しかも天空兵は、優子の命令により、相手の命を奪うことはなかつた。そのため、この戦争における犠牲者は一人も出でていない。

前ルチルクオーツ王が失脚した後、街に縁柱石の分館も建設されたというが、それだけで優子が受け入れられたとは思えない。ルチルクオーツの人々の心を惹きつける何かが、優子にはあるのかもしれない…。だが、その謎は、いとも簡単に解けてしまつた。

「優子ちゃんスカッシュ 天空神編 第528弾“素顔な神さま

”…？」

桜は、店先に並べられていた一冊の写真集を手に取る。それは、縁柱石4コマ劇場ではおなじみ“優子ちゃんシリーズ”的である。

「これって…、まだ続いているの？」

桜は、引きつった笑顔で優子に問いかける。約五千年前の時代から続いているわけだから、“スカツシユ”とは、いつたい何作目のシリーズになるのだろうか。しかも、“スカツシユ”だけで第528弾…。それを見た桜は、呆れるしかなかった。もちろん製造元は、“ルシフ屋本舗”である。

「うーん…。このシリーズを売り出して街の人を受け入れてもらつたようなものだから、今回は半殺し程度で許してあげたのよ。」

優子が言うのだから、彼は本当に半殺しにされたのだろう。桜は、手を合わせて、ルシフの冥福を祈つた。

「あ…、お母さん。ちょっと寄り道してもいいかな?」

城に向かう途中、桜は古びた建物の前で立ち止まる。ここは、桜ガルチルクオーツ王に引き取られる前まで暮していた孤児院であった。

「ちょっとみんなに挨拶しておこうかな～って…」

桜は、頭を搔きながら呟く。前回、この時代に戻ってきたときは、何かとバタバタしていたため挨拶しに来られなかつたのである。それに、この時代へはもう戻らないつもりでいるため、ちゃんとしたお別れもしておきたい。

「そうね…。桜ちゃんのお母さんとして、わたしも挨拶しといたほうがいいかしら?」

真顔で身なりを整える優子に、桜は困つたよつと苦笑した。

「え～っと…」

桜は、建物の陰に隠れ、キヨロキヨロと辺りを見回す。優子たち以外に誰もいないことを確認し、瞳を瞑つて時空力を高めた。その瞬間、桜の身体が急激な成長を始め、十一歳ほどの少女の姿となつた。

「わあ～…。魔法少女だ～～～」

優子による的外れな感想が漏れる。魔法とは魔力を使つたものなので、この場合、时空少女というべきではないだろうか。いや…。

そんなことは、どうでもいいことなのだが…。

「こんな立派に成長してくれて…、お母さん嬉しい～～～」

突然、優子は桜を引き寄せ、ギュッと抱きしめる。この時代のアクアたちに聞いていたのか、本来の姿をした桜を見ても、優子が驚くことはなかつた。

「…あの～、桜さん？」

リウムに抱っこされているアクアは、不思議そうな表情で桜に声をかける。

「服が破れないのも…、魔法少女だから…ですか…？」

そんなつっこみに、桜と優子は啞然としてしまう。確かに、ちびつ子の姿から成長したわりに衣服はまったく破れていない。いつたいどういう仕組みなのだろう。

「魔法少女っていうより…、4コマだから…？」

実際のところ、数分ほど時間を止めて着替えしたわけだが、それを説明するにはどことなく恥かしく思え、桜は適当に誤魔化すことにした。案の定、アクアたちは“4コマ”という説明で納得してくれたようだ。

そのとき、後方で何者かの気配が感じられた。慌てて振り返ると、年配の女性が驚いた様子で桜を見つめていた。

「フローラ…、フローライトなのかい！？」

年配の女性は、信じられないといった表情で桜に近づく。彼女は、桜を育ててくれた孤児院の院長であった。

「い、院長先生…！」

感極まつた桜は、涙を流しながら、院長の胸に飛び込んだ。

「先生、先生！」

ルチルクオーツ王に引き取られてから一年…。桜にとつては、久しぶりの再会である。戦争孤児である桜にとつて…、いや、孤児院で暮らす子どもたちにとつて、彼女は母親も同然の存在であつた。

「フローラ…、大きくなつて…」

院長は、桜の頭を撫でながら、優しそうな笑みを浮かべる。つい

先ほどまで、三歳児姿だったことはもちろん内緒である。

「ところで…、この人たちは…」

翼を持つた天空族優子、額に暗黒石を憑けた暗黒族リウム、頭に小さな角のある光竜の幼体アクア…。奇妙な組み合わせに、院長は怪訝な顔をする。

「あつ、ご挨拶が遅れました…。わたくし、桜ちゃん…、フローライトさんを預からせていただいております、如月優子と申します…」優子は、天空神サファイアの名ではなく、あえて本名で挨拶をする。見慣れぬ風貌を怪訝に思いながらも、院長は挨拶をした。

「そして、わたくしの娘リウムと…。ペットのアクアマリンです…」そう紹介した途端、アクアは、滝のような涙を流した。

「リウムちゃんに…、アクアマリンちゃん…？」

院長は、さらに混乱してしまつ。その名前は、前ルチルクオーツ王の代わりにこの国を治めている一人のものであるからだ。

「おー一方は…、リウムさま、アクアマリンさまのご関係者…なのですか？」

その問いかけには、優子が“本人です”と答える。院長の頭は、さらに混乱してしまつた。

すると、リウムが抱いていたアクアを桜に渡す。大きく息を吸い込み、内なる暗黒力を高めた。

「ががつ、がああああああーーー！」

その瞬間、リウムの額にある暗黒石から、肉片が溢れ出す。リウムの身体を完全に包み込み、巨大な四つ足の獣の姿を形成する。漆黒の毛並みに額の暗黒石と真つ赤な瞳…。リウムが暗黒族へと成長する過程で誕生した、巨大狼型の魔獣の姿となつた。突然、小さな女の子が魔獣となつたのだから、驚かないはずがない。しかし、孤児院の院長は、その変化を平然と眺めている。

「が…う？」

リウムは、今までなかつた反応に戸惑いを覚える。これまでには、リウムが魔獣に変身すれば、誰もが悲鳴を上げて逃げ惑つていた。

それなのに、この院長の反応は、明らかに肩透かしであった。

「まあ…。本当にリウムをまだったのですね…」

院長は、感心したように齒ぐく。どうやら、この時代のリウムも、魔獸姿で街を出歩いてこようである。リウムは、屈辱のようなものを感じて、身体をブルブルと震わせた。

そのときである。リウムの雄叫びが聞こえたのか、施設の中から、子どもたちが飛び出していく。子どもたちは、巨大なリウムを見上げ、嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「ぐが…」

リウムは、ビクッと震え、場からの脱出を試みる。だが、時すでに遅く、子どもたちの怒涛の攻撃が始まった。

「リウムさまだ〜〜〜」

子どもたちは、パツと見は凶暴そうなリウムを見据え、一斉に襲いかかった。丸太のような足にしがみつき、背中によじ登り、頭に飛びつき、尻尾にぶら下がる。リウムは、なす術もなく、揉みくちやにされていた。

「あ〜…。どの時代でも、リウムさんは人気者ですね〜〜〜…」

アクアは、しみじみと感想を漏らした。

リウムは、戦闘型の暗黒族でありながら、成長段階で寄生した三歳の女の子“小林比奈”の無邪気な魂を受け継いだため、暗黒面がほとんど現れていない。それどころか、人々を厄災から護ることに使命感を燃やしている。そのため、凶暴そうな化け物の姿をしていながらもかかわらず、人々はリウムのことを尊敬の意も込めて“黒き魔獸”と呼んでいた。

特に子どもたちからのかれようは凄まじく、見つかれば今回のよつな揉みくちやにされてしまつ。リウムは、無邪気で恐いもの知らすの子どもたちのことを、少しだけ苦手にしていた。

「フローラ…お姉ちゃん？」

子どもの一人が、苦笑する桜に氣づく。桜は、孤児の中では古株で、みんなのお姉さん的存在であった。

「みんなあ、フローラお姉ちゃんが戻ってきたよお～」

すると、リウムに集っていた子どもたちは、嬉しそうに駆けよつてくる。解放されたリウムは、大きくジャンプして、施設の屋根の上でホッと息をついた。

「みんな、元気だつた？」

桜は、子どもたち一人一人の頭を撫でる。この一年間で何人か増えたようだが、ほとんどは桜のいたころから少し成長した仲間たちであった。

「フローラ姉ちゃんは、お姫さまになつたんだよお～！」

小さな男の子が、桜が前ルチルクオーツ王に引き取られたことを、新しく増えた仲間に説明する。時空力を目当てに引き取られ、奴隸のような扱いを受けていた桜だったが、孤児院のみんなからしてみれば王族に迎え入れられたように映つたのだろう。桜は、孤児院の仲間にとつて、自慢すべき姉なのだ。

「いや…、お姫様じやなくつてね…」

桜は、言葉を濁すように苦笑してしまう。ルチルクオーツ城にいたときの桜は、決して人扱いされなかつたからだ。

潜在的な時空力を高めるため、地獄のような特訓をさせられ、まるで感情の無い道具のように扱われていた。何度も逃げ出そうと考えたが、そうすれば孤児院にも迷惑がかかつてしまつかもしれない。桜は、歯を食いしばりながら、過去の時代へ時空間転移できるだけの時空力を手に入れた。

そんな苦労があつたからこそ、今の幸せな生活があるといえる。ショウや優子たちとの生活は、桜にとって本当に大切な時間であつた。

懐かしい孤児院のみんなに別れを告げ、桜たちはルチルクオーツ城の門前へやつてきていた。明日には新国王の戴冠式が行われるため、これまで以上に厳重な警備体制のようである。少し前まで城に出入りしていたとはいえ、奴隸に近い立場であつた桜を、簡単に通してもらえるのだろうか。桜を見た門番たちは、明らかに怪訝な顔をしていた。

「お勤め、ご苦労をます、」

優子は、軽く会釈をして、正門から城内へ入る。すると門番たちは、緊張した面持ちでビシッと背筋を伸ばす。

「さあ、桜ちゃん。行きましょうか」

そう言つて桜の手を取り、引きずるように城内へと入つた。

城へ正門から入るのは初めてのことなので、桜は必要以上に緊張してしまう。最近入り浸つていそうな優子は別として、リウムやアクラも平然としている。一人とも、神の身近に仕える者なので、精神界のお城程度では動じないのだろう。一人だけ緊張している桜は、どこか不公平のように思えてしまうのだった。

「え、え～っと…」

城に入ったときから感じていたことだが、どういうわけか桜に視線が集まっている。立派な服飾に身を包んだ者たちが、様々な感情を含んだ視線を桜に向けている。中には、憎しみを込めたような瞳で、桜を睨みつけている者もいた。

「優…、お母さん。わたし、なんかマズイことでもしちゃつたのかな…？」

これだけの者に注目されることは、今まで無かったことである。あるいは、前ルチルクオーツ王に引き取られていたことが知れ渡っているのかもしれない。

ルチルクオーツは第四聖界クリスタルーの大国であるため、周辺

諸国には高圧的な態度を取つてきた。何らかの理由をつけて領土に攻め入り、停戦のために無理難題を押し付ける。その難題が受け入れない国は、容赦なく滅ぼしてきた。

新国王の戴冠式にはそれらの国の代表も招かれていたようで、彼らからしてみれば桜はルチルクオーツ王の関係者であり、怨まれていたとしてもおかしくはない。

「うーん…。なんとかなーーー」

優子は、誤魔化すように苦笑する。もしかすると理由を知つているのかもしぬないが、優子の態度からすると聞き出すことは難しいだろう。

「まあ、明日のお昼になれば、こっちのアクアちゃんから説明があるんじゃない？」

他人事のように呟く優子を見て、桜は大きくため息をついた。

明日の午後から予定されている新国王の戴冠式。桜は、この時代のアクアに呼ばれて来たわけだが、どうやら戴冠式に出席するだけではなさそうである。最悪の場合、前ルチルクオーツ王の関係者として処罰されることも考えられる。しかし、アクアたちがそのために桜を呼び出すとはおもえない。いつたい明日のお昼に何があるといつただろうか。桜の不安は、高まるばかりであった。

そのとき、前方から騎士甲冑に身を包んだ青年がやつてくる。青年は、優子に気づき、片膝をついて深々と頭を下げた。

「天空神サファイア様。アクアマリン様、リウム様がお待ちしております…」

この青年は、ルチルクオーツの騎士団長を務める“ターフェイト”であった。ターフェイトは、ゆっくりと立ち上がり、先導するように歩き始める。

「あ…、ターフェイト… も…？」

桜は、ターフェイトの後ろ姿に声をかける。すると、振り返ったターフェイトが、いきなり桜の額にデコピンを放つた。

「あうひー。」

「その衝撃に、桜はおもわず仰け反ってしまつ。

「フローラ…。久しぶりだな…」

ターフェアイトは、優しい笑顔を浮かべ、桜の頭をワシャワシャと撫でる。ターフェアイトは、桜が城に引き取られてきてからずっと庇つてくれている、いわばお兄さんのような存在であつた。

「わたしが留守をしていた間、大変な目にあつたそうだな…」

前回、桜がこの時代に戻ってきたとき、天空神サファイア暗殺の失敗から拷問に近い体罰を受けた。それが原因でアクアやリウムの怒りをかい、前ルチルクオーツ王の失脚に繫がつたわけだが、ターフェアイトは戦地に赴いていたため桜を護ることもできなかつた。ターフェアイトは、そのことを少なからず悔やんでいるようだつた。

「はい…。にしつちの時代のアクアちゃんたちに助けられなかつたら、あやうく左腕を無くしちゃうところでした~」

そのときのことは、いま思い出しただけでもゾッとしてしまつ。桜は、優子の暗殺を拒否したため、もつ少しで左腕を斬り落とされたところであった。

「あう！」

再びの「ヒコピン」が桜にヒットする。桜が恨めしそうに見つめると、ターフェアイトは怒つたような表情をしていた。

“アクアマリンさま”…だろ」

桜にとつて、どんなに立派であるうが“アクアちゃん”に変わりない。だが、ターフェアイトたちルチルクオーツの国民にとって、アクアとリウムは国王を代行している者なのだ。

「おい、キサマ…」

突然、桜に抱っこされているアクアが低い声で呟く。

「それ以上、桜さんを侮辱すると…、ボクは許さないぞ…」

牙を剥き出しに唸り声を上げるアクア。マリンブルー色だった美しい瞳は、右が赤紫色、左が青緑色のオッドアイとなつていた。

「なんだこの犬…。喋るのか？」

ターフエイトの失礼なセリフに、アクアは更に怒りの声を上げる。桜が五千年前のアクアとリウムであることを紹介すると、ターフエイトは驚きのあまり全てが真っ白となってしまった。

「」
セレナ^テ・アンド^テ・ララ^テ・スミス^テ

リウムの咳きこぼ場の空気が凍りつく。慌てて櫻が否定すると、リウムはとんでもないことを呟いた。

「じゃあ、死ね……」

その瞬間、リウムを

かああああああああ

この時代は来て二度目の魔晄化だか、今回のはハリハリの戦闘モードである。殺氣を放つりウムは、おれに凶悪な魔獸そのものであった。

どうやらリウムも、ターフェアイトの態度に怒りを覚えていたようである。暗黒族として復活したばかりとはいえ、リウムの力は精神神の守護騎士“五精靈”に匹敵する。全てのルチルクオーツ兵が戦つたとしても、リウムには絶対に敵わない。このままでは、ターフェアイトが殺されてしまうのも時間の問題であつた。しかし、魔獣化したリウムがターフェアイトに襲いかかるうとしたとき、黒い大きな塊が超速で突っ込んできた。塊はリウムを庭園へと吹き飛ばし、圧し掛かるように覆い被さつた。

えつ?

桜は、驚きのあまり声を上げてしまう。リウムの上に乗つかつて
いるのは、リウムの婆とそっくりな狼型の魔獣だつたからだ。

「リ、リウム… ちやん！？」

この時代の魔獸リウムが、魔獸化したリウムの首筋に噛みついている。まさに、わけのわからない展開であつた。

「あ、桜お姉ちゃん、優子お姉ちゃん…。おひさーーー

暴れるリウムの首筋に噛み付きながら、額に憑いた真っ赤な暗黒

石で喋つてゐる。この時代のリウムは、相変わらずなほりのよいであつた。

約五千年を生きてきただけあってか、この時代のリウムの力は復活したばかりのリウムに比べて圧倒的なようである。狂ったように暴れるリウムだったが、がつしりと押さえ込まれて身動きが取れなかつた。

そこに、美しい容姿をした青年が現れた。その姿を見たターフェイトは、地面に片膝を付き、深々と頭を下げる。その青年こそ、この時代に存在する光竜アクアマリンであつた。

「リウムさん！ 何を暴れているんですか……って。あれ？」

アクアは、騒ぎを起こしている人ばかりの中に桜の姿を見つける。「桜さん、いらっしゃっていたのです……か？」

駆け寄つてくるアクアだったが、桜の抱いている光竜の幼体を見てもわざギョッとしてしまう。

「やっぱり、この時代に来てしまったのですね……」

アクアは、あらためてリウムが押さえ込んでいる魔獣を見て、頭痛を覚えたかのように目頭を押さえる。

「リウムさん……。過去の自分とは接触してはならないと、あれほど言つておいたじゃないですか！」

いくら“4コマ”とはいって、当人同士の接触はなるべく避けたほうがいいはずである。まあ、5話目に突入してまだまだ終わりそうにない本編も、すでに4コマとは言えないのだが……。と、とにかく、この時代のアクアも、時空間崩壊の危険性を考えていたようだ。

「それに、自分でいうのも変だと思いますが……。どうしてこの時代に来てしまったのですか？ 非常に軽率すぎる行動ですよ……」

アクアは、桜の抱っこしている仔犬姿の自分に問いかけた。

「そんなこと決まっています……」

その問いに、ちびアクアは、呆れたように呟く。

「いったい何を企んでいるのかは知りませんが……、ボクたちは桜さんの安全を護るためについて来ました……。何があつたとしても、桜さんがボクたちの時代……如月家に帰れるようにね……」

ちびアクアは、自分の思考を先読みするように答える。そのまま

桜だけを未来に向かわせたら一度と帰つてこない…。そんな予感がちびアクアにはあつたようだ。

図星をつかれたのか、アクアは苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちする。あきらかに“余計なことを…”といった顔をしていた。

「いやあ～ん アクアちゃん、賢い～～～」

突然、リウムが煙に包まれたかとおもうと、一人の美しい女性が飛び出してくる。女性は青年姿のアクアを突き飛ばし、桜の腕からちびアクアを奪い取り、嬉しそうに頬擦りをした。

「このアクアちゃん、かわいすぎ～～～」

そして、呆れ顔のアクアを指差し、大きな声で叫んだ。

「いい、アクアちゃん。間違つてもこんな大人に成長したらダメだからね！」

無理難題を叫ぶ謎の女性に、わけがわからないちびアクアは目を白黒させた。

「リ、リウムさん…。こんな大人つて…」

アクアは、しくしくと涙目で抗議する。そう、ちびアクアを抱える彼女こそ、成長した暗黒族リウムであった。

「まあ、詳しい話は後にするとして…。ターフェアイトさん、彼女たちを客間へご案内…」

そのアクアの言葉は、最後まで続かなかつた。一瞬の隙をついて、倒されていたはずの魔獣リウムが、アクアを頭から咥え込んでしまつたからだ。

「んんっ、んんんんんーーーー！」

リウムの口から飛び出している両足は、苦しそうにジタバタしている。

「はむはむはむ

かわいく効果音を口にするリウムだったが、凶悪そうな獣に喰われているようにしか見えない。そのうち、バキバキボキボキといった、骨を噛み碎くような音がリウムの口から聞こえてきた。

「ア、アクアマリン様ーーー！」

ターフェイトの悲鳴が城内に響き渡る。

「わあ、わああああ。昔のあたし！ そんなばっちいの、ぺつて
しなさいぺつて！」

慌てて吐き出すよつて指示するが、リウムは楽しそうに尻尾を振
るだけでいうことをきかない。

「あらあら」

成り行きを見守っていた優子は、可笑しそうに微笑を浮かべてい
る。リウムお得意のはむはむも、この時代ではなかなか見ることが
できない光景のようだった。

客間に案内された桜たちは、この時代のアクアやリウムからルチルクオーツの情勢を聞かされた。

表立った行動はないものの、国王不在の状況をチャンスと見ているのか、他国の軍備が整つてきているという。このままでは、そう遠くないうちに国中を巻き込んだ戦争が起こるかもしない。そうならないためにも、新国王を誕生させ、周辺諸国に向けてルチルクオーツ健在をアピールする必要があつたらしい。

「まあ、アクアちゃんやリウムちゃんがいるルチルクオーツに攻め込んでも、返り討ちになるのがオチなんだけどね～」

優子の笑顔が真実を物語つている。最近も国境付近で大規模な戦闘があつたそうだが、数千の軍勢をアクアとリウムだけで追つ払つたという。それ以降は相手も警戒してか、国境の向うで増軍に精を出しているようだ。

「そこの国王も明日の戴冠式に呼ばれて来てるわけだけど、なにかいベントを起こしてくれそうな気がして、いまから楽しみよね～」

「無責任な発言に、アクアは大きなため息をつく。

「優子さん、変なことを言わないでください…。ただしさえ、神経の使いすぎで胃がキリキリしてるんですから…」

アクアは、心底疲れたような表情を見せる。国王代行という職務は、想像以上に大変のようだった。

「ですが、それも明日まで…。桜さん…、明日はビシッと決めてくださいね」

そう言つて、桜の肩に手を置くアクア。何をビシッと決めるのだろうか…。桜は、意味がわからず、小首を傾げてしまった。

「では、ボクとリウムさんは、まだ仕事がありますので失礼します…。行きますよリウムさん！」

アクアは、まだ遊ぶと言つて黙々をこねるリウムを丐がするよつに、客間から出でていつてしまつた。

「…「あ～ん。ボクの」とは別として…、あのリウムさんは違和感ありますまくりですね…」

ちびアクアは、ちびつ子リウムを見ながら、この時代のリウムを思い出していた。

「どちらかといえば、あの雰囲気は“アリス”さんに似ている気がします」

その台詞には、アリスを知る全ての者が頷いた。この無表情なちびつ子リウムは、どうやら成長するとアリスっぽい性格にならうとい。

「さて、お話ししなれへりにして、早く寝てしまわないと明日に響くわよ」

桜が大きなあぐびをしたことに気つき、優子はそう提案する。

精霊族や天空族は、基本的に食事や睡眠を取るの必要はなかつたが、しばらく如月家で生活していた桜には習慣的な欲求があるようである。よほど疲れていたのか、桜は優子と一緒にベッドに潜り込んだとたん、静かな寝息を立てはじめるのだった。

翌日のお毎近くとなり、部屋でくつろいでいた桜たちにも、城内の慌ただしさが伝わってきていた。城の者たちは、本日の過ぎに行われる戴冠式の準備に忙しいようである。

「わたし、手伝わなくていいのかな…」

桜は、いかにも居心地が悪そうである。城の者たちが働いているのに、桜だけがこのような立派な部屋でくつろいでいるわけにはいかない。以前なら、誰もがやりたくなさそうな仕事を、真っ先にさせられていたところである。もちろん、その仕事に對して、対価が支払われることはなかつた。桜の位置づけは、ほとんど家畜と同じだつたのだ。そのことを思い出すと、桜はなんだか憂鬱になつてくる。

「さくら…お姉ちゃん…」

哀しそうな表情をしていることに気がついたのか、ちびっ子リウムが桜に抱き付いてきた。ちびっ子リウムも桜のことが心配なのだろう。

「そんなのほおっておけばいいのですよ…。ボクたちは、過去の世界からやつてきたお客様なのですから」

ちびアクアの頭の中では、桜はこの時代の住人ではなく、あくまでも自分たちの時代…五千年前の者であるようだ。

「で、でも…」

桜は、納得できないように咳く。優子もこの時代のアクアたちに話があると出ていてしまい、部屋に残されたのは桜たち三人だけであった。

そのとき、たくさんの侍女たちが部屋に突入していく。慌てて身を強張らせる桜だが、ちびアクアの瞳がいつもマリンブルー色をしていることに気づき、危険がないことを悟った。侍女たちは、桜の周りに集まり、持ってきた綺麗なドレスを着せようとする。

「ちょっと、着替えぐらい自分でできますから…」

戴冠式用の衣装なのだろうが、わざわざ着替えさせてもららう必要はない。慌てて断ろうとする桜だが、侍女たちはまったく聞く耳をもたなさそうである。気づくと、ちびっ子リウムも、着替えさせられていた。桜も諦めて身を任せるしかなさそうだ。

ドレスに着替えた桜は、持ち込まれた姿見に映る自分の姿を見て、おもわず息を呑んでしまった。そこに映っていた姿は、まるでどこのお姫様のようである。見れば見るほど、普段の自分とはかけ離れた姿であった。

「素敵ですよ、桜さん」

アクアは、尻尾をバサバサと振りながら、桜に声をかける。その瞬間、桜の顔は、トマトのように真っ赤になつた。すると、同じくドレス姿のちびっ子リウムが、ちびアクアの近くに駆けよる。そして、しつかり見てもらうようと、くるりと一回転した。

「馬子にも衣装…」

次の瞬間、ちびアクアは大理石の壁にめり込んでいた。

「でも…、」れつて…」

桜は、あらためて着せられたドレスに目をやつた。白を基調とした清楚なドレスで、胸の位置にはルチルクオーツ国の紋章を象った刺繡がされている。国の紋章が付いた衣装など、王族の者でしか着ることが許されていない。

「あ、あの…。もう少し、普通のドレスの方が…」

困ったように咳く桜だったが、たくさんいたはずの侍女たちは、いつの間にかいなくなってしまっていた。しかも、『ト寧にいままで着ていた服も回収していつたようだ。

「う…そ…」

桜の顔から血の気が引いてしまつ。『れではまるで、桜がこの国のお姫様であるかのようであった。

王族の名を騙ることば、あきらかに重罪である。見つかれば即取り押さえられ、最悪の場合、斬首になつてしまつ。こんなドレスを着せ、アクアは何をやらせるつもりなのだろうか…。そこに、精霊騎士の鎧に身を包んだアクアがやつてきた。

「桜さん、準備はよろしいですね」

アクアは、二コ二コ顔で桜の手を取る。慌てる桜を他所に、どんどん城内の奥へと進んでいく。桜が何を聞いても、『もうすぐわかりますから』と言葉を濁されるだけであった。

この時代のアクアによつて連れられてきた場所とは、ルチルクオーツ城の最上部にある王座の間であつた。これから、この王座の間で新国王の戴冠式が行われるのである。そのような場に、このよつなドレスを着て現れたら、それこそ一大事となるだろう。桜は、騒ぎの様子を想像して、冷や汗をかいた。

「ア、アクア…ちゃん？ お願いだから見逃して…」

軽いパニックとなつている桜の言動は、もはや意味不明である。

しかし、アクアは問答無用に、桜を引き連れて王座の間へ…しかも、正面の入り口から入ってしまった。

「ひつ！」

その瞬間、全ての視線が桜に集中する。戴冠式の出席者は、全て身分の高い者たちで、桜はあきらかに場違いである。桜は、緊張のあまり、頭が真っ白となってしまった。

「桜さん…。真っ直ぐ進んで、あの神官の前で片膝をついてください…」

桜の耳元でアクアがそんなことを囁く。

「あ、あ、あ…」

桜は、まるで暗示にでもかかったかのように、ゆっくりと赤い敷物の上を歩く。王座まで進み、言われたままに神官の前で跪いた。神官が何やらブツブツと唱えているようだが桜の頭にはまるで入つてこない。ただ、夢の中にいるような、そんな感覚であった。

しばらくすると、桜の頭上に何かが置かれたような感じを覚える。その瞬間、王座の間にいた全ての者が、ドッと歓声を上げた。

「えつ！ なにっ！」

その歓声に、桜は我を取り戻す。慌てて見回すと、全ての者が桜に祝福の言葉を送っているようである。

「なにが、どうなつて…」

桜は、ふと頭の上に手をやつしてみる。いつのまにか、なにか冠のようなモノが、桜の頭上にのせられていた。

「桜さん、おめでとうございます 」

袖のほうから「一〇一〇」顔のアクアが現れる。何がおめでたいのかわからない桜は、しきりに頭を捻つていて。そのたびに、頭の「冠」が落ちそうになり、慌てて手を添えるのだった。

「えつと、一応桜さんの名前は、『 フローライト・S (桜) ・ ルチルクオーツ十三世 ” になりますので 」

その言葉に、桜の頭は再び真っ白になつた。

「 フローライト・S ・ ルチルクオーツ…十三世？」

桜は、落ちついて考えてみる。フローライトも桜も自分の名前ではあるが、ルチルクオーツ十三世とはいつたい誰のことなのだろうか…。前ルチルクオーツ王は、たしか十一世であつたはずである。つまり、ルチルクオーツ十三世とは、新国王のことなのだろう。「で…。新しい国王さまはどちらに？」

周囲を確認する桜だったが、それらしき人物は見当たらない。不思議そうに視線を戻してみると、アクアが桜を指差していた。嫌な予感が桜を襲う…。皆、桜に向いて祝福の言葉を上げている。そして桜の名は、いつのまにか“フローライト・S・ルチルクオーツ十三世”といついかにもそれっぽいモノに変えられてしまった。

「あの…。アクア…ちゃん？」

すると、満面の笑みを浮べたアクアは、桜の肩に手をのせて、信じられない…いや、信じたくない言葉を口にした。

「がんばってくださいね。新女王さま」

やつと肩の荷が下りたように、アクアの表情は晴々としていた。桜がその言葉を理解するのに、一分ほどかかってしまう。次の瞬間、桜の叫び声がルチルクオーツ中に響き渡った。こうして桜は、精霊界第四聖界クリスタルの中で一番大きなルチルクオーツ国の女王となってしまった。

第12話 ルチルクオーツの事情

戴冠式の後、わけのわからぬ間に国民へのお披露目が行われた。だが、見知らぬ少女が城のテラスでぎこちなく微笑んでいることに、皆が困惑の声を上げる。一部、孤児院の仲間たちが桜に気づいて騒ぎ立てるものの、頼りなさそうな少女がルチルクオーツの女王となることに誰もが不安を覚えた。それもそのはず…。クリスタル最大の大国であるルチルクオーツは、今までこそ休戦にあるが、周辺諸国へ戦争を仕掛けている最中だからだ。

このような少女が新女王であると知れたら、それほど経たないうちに他国が攻め入つてくるだろう。また、新女王がこんな少女では、戦争に勝てるはずもなかつた。国民の不安は、当然なものだといった。

騒ぎ立てる国民に、桜はどうしていいのかわからずオロオロしてしまう。すると、桜の後ろから優子が現れた。優子は、桜の肩に手を回し、彼女がこの聖界クリスタルを創造した精霊神クリスタル（ショウ）と天空神である自分の娘だと説明した。

それを聞いた国民は、新女王が一人の神の娘であることに驚きと喜びの声を上げる。神の娘であるのなら、人知を越えた能力の持ち主であることに間違はない。

それほどたいした能力を持たない桜は、国民の期待に満ちたまなげしに、顔を引きつらせるしかなかつた。

後日、各国の代表者が再びルチルクオーツ城に集まつた。ルチルクオーツの…いや、精霊界第四聖界クリスタル全体のあり方についての会議である。

各国の代表者は、いつものようにルチルクオーツが無理難題を押し付けるのだと身構えていた。しかし、会場に集まつてみた各国の代表者は、その雰囲気に愕然としてしまつた。

庭には花が飾られた丸いテーブルがいくつもあり、その上には様々な菓子が並べられている。各国の代表者は、適当な位置の席を勧められ、居心地の悪そうに座っていた。そこに、とても良い香りのする紅茶が運ばれてくる。だが、各国の代表者たちは、紅茶を準備している人物に気づき唖然としてしまった。その人物こそ、ルチルクオーツ国的新女王となつた“フローライト・S（桜）・ルチルクオーツ十三世”であつたからだ。

「みなさま…。本日は、親睦を深める会に御出席いただき、まことにありがとうございました」

桜がにっこり微笑むと、各国代表者の頭上にたくさんのハテナマークが浮かび上がる。一触即発の覚悟で臨んだ集まりが、まさかこのようなものだとは思わなかつたからだ。

「えへっと、あまり上手には作れなかつたかもしぬがお菓子を用意しましたので、よろしければお召し上がりくださいね」

とろけるような笑顔に、各國代表者も微笑みを浮かべる。皆、桜手作りのお菓子を食べ、隣りの席の代表者と、穏やかな雰囲気で話しへ彈ませた。

桜は、代表者たちに紅茶を注ぎながら、それぞれの国の事情を聞いて回る。観光客の受け入れや送り出し、輸入・輸出の交渉、技術提供や資金援助、軍事力縮小に大量破壊兵器の禁止など、話しは様々な方面に膨らむ。書面を交わすわけでもなく口約束同然なのだが、ここで決められた内容は全てが実現することだろう。

「このクリスタルは、気の遠くなるほど長い間、戦いが絶えませんでした…」

お茶会も落ちついたころ、桜は全ての代表者たちから見える位置に立ち、そんなことを話し始めた。

「もちろん、このルチルクオーツが中心となり、戦火を広めていたことはお詫びのしようもありません」

桜は、深々と頭を下げる。一国の代表者が人前で頭を下げるなど、普通では考えられないことであった。

「わたしは本当の両親も…、戦争の犠牲となつて死んでしまいました…」

その淋しそうな声に、会場はざわめく。代表者たちは、このときはじめて、桜が戦争孤児であったことを知った。

「わたしたちは、いつたいなんのために戦つてているのでしょうか…。この聖界を創造なされ、わたしを引き取つてくれたお父さん…。精霊神クリスタルさまは、戦いの世界など絶対に望んでいません」ショウなら、聖界が平和になる道を選ぶはずである。ショウと共に暮らし、彼の考えはある程度わかるつもりだ。

「わたしこと“フローライト・S（桜）・ルチルクオーツ十三世”は、この場で宣言します…」

桜は大きく息を吸い込む。

「我がルチルクオーツは、現在の戦いを放棄し、今後一切の争いを望みません！」

それは、見事な平和宣言であった。

この会議（お茶会）を機に、精霊界第四聖界クリスタルは戦争終結に向けて歩み始めることになる。桜は、千年以上も続いていた争いを治めたことで、後に“平和の神”としての称号を与えられることになるのだった。

「いやあー。さすがですねー」

お茶会も無事に終り、アクアは王座に座る桜に話しかける。

「各国代表者の方々も、皆、聖界の平和に向けて協力してくださるそうです」

桜が女王になつたことで、戦争を無くすために各国へ働きかけると思っていたが、まさか一日でそれを成し遂げるとはアクアにも予想できなかつたことである。

「やはり、国王の職務は、ボクなんかより桜さんが行つたほうが良いのですね。これからもこの時代に残り、このルチルクオーツ国の平和のため、桜さんが女王として…」

ふと、アクアは嫌な予感を覚える。これだけ話せば、桜から何らかの反応があつたとしてもおかしくはない。だが、桜は、ジッと押し黙つたままである。

「さくら… もん？」

アクアは、恐る恐る王座に視線を向けてみる。

「あが…！」

それを見た瞬間、アクアは顎が外れるほど大口を開けた。桜の座つていたはずの王座には、どういうわけか“信楽焼きのたぬき”が置かれていたからだ。

「つて、なんで“ファーロルさん”がここに！ 桜さんは、どこへいったのですか――！」

パニックとなつたアクアは、城中を駆け回つて桜を探し求める。しかし、桜の姿はどこにも見当たらなかつた。

信楽焼きのたぬき（通称“ファーロルさんシステム”）のお腹には、一枚のメモが貼られていた。そこには、“あとはよろしくね”と、桜の文字で可愛く書かれていた。

「あつはつはつ。それは災難だつたな、桜！」

桜の話を聞いて、ショウは大きな声で笑つた。

「災難じやないよお。まつたく…」

三歳児姿に戻つた桜は、頬を膨らませながらくれてしまつ。桜は、如月家へ帰つてきてすぐに、ショウの部屋で未来の出来事を話していた。

桜は一週間も如月家を空けていたわけだが、未来のアクアからショウに通信があつたようでそれほど心配されることはなかつた。桜の正体を知らないこの時代の優子には、綾菜が適当に誤魔化してくれたようである。

「それにしても、桜は良い」としたな…」

ショウは、桜を抱き寄せ、膝の上に乗せた。

「人は争いが止められない生き物だが、努力によつてそれを回避す

ることもできる。今回桜は、その手助けをしたわけだ……。もつと自信を持つてもいいんだぞ……」

照れる桜の頭を、ショウは優しく撫で続ける。まるで、本当の親子みたいであった。

「といひでお父さん……。あの冷蔵庫つて……？」

桜は、部屋の端に置かれている小さな冷蔵庫をチラリと見る。

「あれつて、綾菜ママの部屋にあつた冷蔵庫じや……」

なぜか、もの凄く嫌な予感がした桜は、ショウの腕にしがみつきながら呟く。綾菜の部屋にある冷蔵庫は、冷蔵庫のよう見えるが、天空界へと繋がる小型の転移門であるからだ。

「ああ……。あれば、桜にラルドさんからのプレゼントだそうだ……」

「あ～、手紙も預かってるね……」

そう言つと、ビニから取り出したのか、一つの便箋を桜に渡した。

「て、手紙？　な、なにかな……」

桜は、恐る恐る便箋を広げてみる。その途端、頭の中は真っ白となつた。

「ん？　え～と……、『ちやんと仕事しin』？　仕事つて女王のことか～？」

固まつてゐる桜から手紙を抜き取つたショウは、内容を読み上げてみる。ラルドは、いつたい何を考えてゐるのだろう。桜は、金縛りにでもあつたかのよつに動こうとした。ショウは、しかたなく、冷蔵庫の扉を開けてみることにした。

「あ～、ダメ……！」

止めよつとした桜だったが、少し遅かったようである。ショウが扉の中を覗きこむと、約五千年先の未来で、国王代行の職務に追われるアクアの姿が見えた。

『桜さあ～～～ん……。帰つてきてくださいよお～～～』

涙ながらに職務をこなすアクア……。ビニヤリ、未来のリウムは、仕事を手伝ってくれないようである。

「う~ん…」

ショウは、考え込むよつにひって、冷蔵庫の扉を閉めた。

「見なかつたことにしょ~つ…」

ショウがそう齒くと、桜は「ククク」と首を振つて激しく同意した。桜がこの冷蔵庫を使って、未来のルチルクオーツに行き来するのは、もうしばらく先のことになるのかもしれない。

おしまい…

第1-2話 ルチルクオーツの事情（後書き）

あとがき

前作の「フローライト」では投げっぱなしに終わってしまいましてので、話を補完するためにも、続編を書いてみました。王様倒してまま話を終わらせたらダメだろ？（笑）

それにしても、アクアちゃんは未来でも不幸ですね。今でも不幸ですがリウムも成長してるもんだから、苦労が絶えそうにあります。はたしてアクアにも幸せが訪れるのでしょうか？

まあ、不幸なアクアの話はこれぐらいにして、「ルチルクオーツの事情」はいかがでしたか。桜は、他作品でちょこちょこと顔を出しますので、これからもよろしくお願いします。

2008/03/30 Crystal

桜のひみつ「ルチルクオーツの事情」 2005/12/07~2006/01/11 連載作品（全7話）

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal Legend 7-2 ～トルマリンの胎動～」、「Crystal Legend 7-3 ～はじまりの時代～」、「Crystal Legend 7-4 ～もしかして怪談？～」
超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」

なんぢやらプラネット シリーズ 「なんぢやらプラネット」
美咲ちゃん シリーズ 「～もしかして怪談？～」
4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9216d/>

桜のひみつ

2010年10月8日15時04分発行